
ストラトス・ZERO

アルヴィト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストラトス・ZERO

【Nコード】

N7352F

【作者名】

アルヴィト

【あらすじ】

エースコンバット・ゼロとストラトス・フォーのクロスオーバー小説。

鬼神が飛ぶのは、誰も殺す必要のない空。そして目指すのは、遥かなる宇宙。

CODE : 000 ZERO (前書き)

この小説には、物語の構成上、どうしても不自然になってしまう箇所が存在します。そういった部分は可能な限り減らしていく所存ですが、もし見つけてしまった場合は、申し訳ありませんが“そういうもの”として読んでやってください。また、一部オリジナル要素を含みます。

CODE : 000 ZERO

アヴァロンダムの“V2”の発射制御装置を破壊した俺たちは、上空での待機を命じられていた。

《俺、基地に恋人がいるんですよ。帰ったらプロポーズしよう。花束も買ってあったりして》

PJはすでに戦闘が終了したと思っているようだが、俺にはある疑問があった。ラリーも“国境無き世界”に参加しているはずだ。だが、あいつは最後まで現れなかった。

(あいつは、一体どこにいったんだ?)

そんなことを考えていたとき、イーグルアイから緊急通信が入った。

《警告、前方よりアンノウン急速接近!》

《まだ敵機が!?!》

レーダーに目を向けると、確かに遙か前方に機影が映っている。そして――

《アンノウンより高エネルギー反応!?! 全機、ブレイク、ブレイク!?!》

《うおおあああつ!?!》

遙か前方から襲い掛かってきた赤い閃光が、PJの機体を貫く。

炎を吹き上げ、破片を撒き散らしながらPJは大地へと墜ちていった。

《PJ！？　おい、応答しろ、PJ！！》

イーグルアイが必死に呼び掛けるが、応答があることはありえないだろう。

PJの機体は、コックピットを丸ごと消滅させられていた。ベイルアウトなど、絶対に不可能だ。

俺は、今の閃光を放ったであろうアンノウンの方を睨み付ける。アンノウンはまだ視認出来ない。

だが、一つだけ確信できることがある。その機体に乗っているパイロットは――

《――戦う理由は見つかったか、相棒？》

「……やはりおまえか、ラリー」

やはり来たか。

だが、すでに戦闘は終結している。

（一体何故、このタイミングで……？）

この疑問は、イーグルアイの悲鳴のような報告で解明された。

《馬鹿な……核ミサイルサイロの再起動を確認！！》

つまり、この戦闘はまだ終わっていなかったということだ。おそらく、ラリーの登場も関係しているだろう。

《ガルム隊、作戦続行。交戦せよ!》

その言葉とともに、俺は機体を急加速。

ラリーの機体へと接近していく。

だが、あいつの機体から放たれるレーザーによって、なかなか接近できない。

《状況分析を行なう。それまで持ちこたえろ!》

俺は、イーグルアイが早く解析してくれることを祈りながら、武装を再確認。

これまでの戦闘でだいぶ消費してしまった。

ミサイルは1発しか残っていないし、機銃も燃料も残り僅かだ。

“V2”発射のタイムリミットもある。

この戦いは、間違いなく短期決戦になるだろう。

《降ってきたか……》

レーザーを回避しながら、俺も外に目を向ける。

高速戦闘を行なっている故に分からなかったが、確かに雪が降っているようだ。

《不死身のエースつてのは戦場に長くいた奴の過信だ……おまえのことだよ、相棒》

俺たちは真正面からすれ違う。

その時、奴の機体を確認することが出来た。

2基の大型エンジンとエアインテーク、そして右側が赤く塗装された前進翼……随分と大型の機体だ。

おまけに見たことがない——おそらく新型だろう。

また、機体の上に乗っていた大型のバックパックのようなポッド。あれがレーザーの発射装置のようだ。

レーザーを撃てなくするためには、あれを破壊するしかない。

「……なら、それが過信かどうか確かめてみようか」

撃ち放たれたレーザーを回避すると、俺は、敢えてモルガンの正面から接近。

これは、一種の賭けみたいなものだった。

確かに、レーザーの威力は強大だが、チャージ時間も必要とする。

今回は、その隙を突くような格好になった。

奴もミサイルを放ち、迎撃してくるが、俺はそれを機銃を撃ちながら急上昇することで回避する。

一方、こちらが撃ち放った弾丸は、本体には命中しなかったものの、数発がレーザーポッドへと直撃した。

《ちっ、レーザーポッドがやられたか》

ラリーは、慌てたようにレーザーポッドをパージ。

そして、それは落下していく途中で爆発。

大型爆弾に匹敵する程の爆炎は、レーザーに使用されていたエネルギー量を物語っていた。

《第一分析が完了！》

イーグルアイから通信が入る。

どうやら、何か分かったことがあったようだ。

《敵機から地上への信号を確認。あの機体が“V2”の発射を握っている！》

なるほど、そういうことだったのか。

地上の発射制御装置はあくまで予備。

本命は、その上空を悠々と飛んでいたというわけだ。

イーグルアイとの通信が切れると同時に、ラリーの後ろに回り込むすると、ラリーは機体を急上昇させ、左後方へと少し大型のミサイルを放った。

だが、まるで放り捨てるような軌道だ。

何だか嫌な予感がする。

あいつがミサイルを無駄に捨てるわけがない。

その直感に従い、機体を急反転させ、ミサイルから離れる。

直後、ミサイルとは思えないほどの爆発が視界を埋め尽くす。

あのまま飛行していたら、間違いなく巻き込まれていただろう。

《ほう、この散弾ミサイルをよく避けたな。》

散弾ミサイル——おそらくMPBMの一種だろう。

だが、なんて威力だ。

今の威力から予測して、中規模の基地くらいなら壊滅させられるだろう。

地上からは、まるで“鉄の雨”が降ってきたように感じるに違いない。

《相棒、ここから境目が見えるか？ 国境は俺達に何をくれた？ 全てをゼロに戻す。そのための“V2”だ》

今度は横から接近するが、横方向に発射された散弾ミサイルがこちらの接近を阻害する。

あのミサイルはさまざまな方向に発射できるらしい。
なかなか隙を見つけることができない。

弾切れまで粘る方法もあるが、その間に“V2”を発射されては意味がない。

《相棒、皮肉だな。終止符打ちが、番犬ガルド同士とはな》

「何を馬鹿げた事を。終止符など打たせない」

《そうだな、これは終局じゃない。ここから全てが始まる。分かるな？》

「おいおい、それこそ皮肉だな、ラリー」

《相棒、道は一つだ。信念に従い行動する。それだけだ》

「その信念に、罪無き人々も巻き込むのか？」

《戦いに慈悲はない。生きる者と死ぬ者がいる。それが全てだ》

「ふざけるなよ、ラリー。守るべき存在を滅ぼすような信念に、世界を変えることなんて不可能だ」

《奮い立つか？ ならば、俺を落としてみせろ》

そう言うと同時に、ラリーは搭載している散弾ミサイルの残りを放つ。

3発の散弾ミサイルが、こちらの進路を封じるかのように展開。俺は機体を急速反転し、それを回避する。

だが、複数の散弾ミサイルの爆発の衝撃が、機体を大きく震わせる。次の攻撃を警戒し、ラリーの機影を探すが、奴は追撃をしようともせず、上空を飛んでいた。

(あいつ、一体何を?)

その理由は、すぐに分かることとなった。

《……時間だ》

ラリーがそう言った直後、大地から膨大な白煙と共に何かが飛び出してくる。

間違いない、あれは――

《くそつ、“V2”の発射を確認!》

間に合わなかった。

俺たちは、“V2”の発射を止めることができなかったのだ。まるで俺たちを嘲笑うかのように、“V2”は遙か上空へと飛翔していく。

《惜しかったなあ、相棒。歪んだパズルは一度リセットするべきだ。
“V2”で全てを“ゼロ”に戻し、次の世代に未来を託そう》

「くつ……まだ終わっていないぞ!」

“V2”はまだ大気圏の外にある。

管制機であるあの機体を撃墜すれば、まだ間に合う。俺は奴に急速接近し、バルカンを撃ち込んだ。

だが、弾丸はまるでその軌道を何かに捻じ曲げられたかのように弾き返される。

「なにっ!?!」

あまりのことに驚いていると、イーグルアイから通信が入る。

《こちらAWACS。サイファー、聞け！ 敵機体の解析結果が出た。コード名は“モルガン”。あの機体は、ECM防御システムによって護られている》

(……なるほどな)

ECMは、電子戦機などに搭載されている、ミサイルの誘導装置を狂わせるシステムだ。

だが、機銃すら防ぐECMなんて聞いたことがない。

おそらく、電磁妨害の機能を応用して、機体周囲に電磁シールドのようなものを展開しているのだろう。

《唯一の弱点は、前方のエアインテークだ。正面角度からの攻撃を行い、“モルガン”を撃墜しろ。今、ここで彼を倒せるのは君しかない。 “円卓の鬼神”、健闘を祈る！》

弱点は前方か。

おそらく、あの電磁妨害は自身の攻撃も捻じ曲げてしまうのだろう。防御が完璧でも、攻撃できなければどうにもならないからな。

今まで使用しなかった理由も、何となく予測できた。

もともと大量の電力を必要とするECMをさらに強化したシステムだ。

レーザーの発射に必要な出力を得るために、ジェネレーターからの電力供給を遮断していたのだろう。

そして、散弾ミサイル。

あれは、前方だけでなく様々な方向に発射可能なミサイルだ。

電磁シールドがその軌道を捻じ曲げたことで、自身がミサイルの効

果範囲内に入ってしまったえば、さすがに自滅は免れないだろう。
なんにせよ、せっかく見つかった弱点だ。
他に手はないのなら、利用するしかない。

俺は、機体を大きく旋回させ、モルガンの鼻先へと機首を向ける。

《正面からの一騎打ちか。いいだろう、受けてやる》

弱点を突かれたにもかかわらず、ラリーはそのまま突っ込んでくる。
モルガンの機体性能、そして己の腕に絶対の自信があるのだろう。

《相棒、俺とおまえは鏡みたいなものだ》

突拍子もないことを言いだしたと思ったが、すぐに納得する。

正面から向き合っている今の状況は、確かに鏡を見ている状態にそっくりかもしれない。

《向かい合って初めて本当の自分に気付く。……似てはいるが、正
反対だな》

射程内に入った直後、俺たちはほぼ同時にミサイルを発射。

しかし、同高度真正面から放たれたミサイルは正面衝突し、空中で
爆散してしまう。

爆炎の中を一気に通過し、後ろを振り替えるが、モルガン自体にダ
メージは与えられていない。

だが——狙い通りだ。

爆散したミサイルの破片がモルガンのエアインテークから吸い込ま
れ、内部で暴れ回り、エンジンにダメージを与えた。

遠目にもエアインテーク後方から煙が吹き出しているのが分かる。
しかし、まだ墜ちない。

（なら、もう一度だ！）

先程と同じように、あいつともう一度真正面から向き合う。残った武装は弾切れ寸前のバルカンのみ。

おまけに、どうやら俺の機体も破片を吸い込んだらしく、エンジンの出力が急激に低下している。

これを外せば、文字通りあとはないだろう。

モルガンを照準レイトクルの中心に見据えながら、俺はあいつに近づいていく。

射程内に入ったが、まだ撃たない。

（まだまだ……まだ近づく必要がある）

今度こそ確実に仕留める。

故に、まだ撃つわけにはいかない。

《撃てよ、臆病者！》

——何故そんなことを言うのか分からなかった。

武装のほとんど残っていない俺への挑発にも聞こえるが、俺には、自分を墜としてほしい、そういつているように感じた。

いつたい、何故——

《V2の再突入まであと1分を切ったぞ！》

イーグルアイの悲鳴のような報告に、無理矢理思考を切り替える。余計なことを考えている暇はない。

今、俺がやらねばならないことはV2を止めること。核を落とされた七つの街。

あの光景を、繰り返させるわけにはいかない。

そして、俺たちはお互いの機体のはつきり視認できる距離まで接近する。

《撃て！》

その言葉に、反射的にトリガーを引く。

あいつも同時にミサイルを撃ってきた。

放たれたミサイルを俺は機体を無理矢理ロールさせることで回避する。

一瞬機体のすぐ傍を通り過ぎるミサイルが見え、冷や汗が吹き出す。一方、俺の放ったバルカンもモルガンの左エインタークに吸い込まれるように命中。

破片と違い、装甲自体を食い破った弾丸は左エンジンを内側から破壊。

バランスを崩したのか、モルガンは垂直に右に傾く。

それに合わせるように、俺も機体を垂直にする。

俺たちの機体は、腹を見せあうように、そしてぎりぎりの距離ですれ違う。

その瞬間、小さくあいつの声が聞こえた。

《——相棒……おまえの、勝ちだ》

その言葉に振り向いた時、モルガンはエンジン部から炎を吹き出し、爆発。

ベイルアウトは——確認できなかった。

直後、轟音と共に遙か上空に巨大な閃光が生まれる。

管制機であるモルガンが撃墜されたことで、V2は自爆したのだろう。

突如太陽がもう一つ出現したようなその光は、核がどこにも落ちる事無く消滅したことを示していた。

「終わった、か……」

バルカンの残弾は0。

機体もエンジンも悲鳴をあげている。

正直言つて満身創痍だ。

もしかしたら、帰還すら危ういかもしれない。

と、脳裏にある疑問がよぎる。

(……そういえば、何故あいつはバルカンを使わなかったんだ?)

先程の戦い、ラリーは一度もバルカンを使用しなかった。

モルガンにもバルカンは搭載されているはず。

なのに、なぜ撃つてこなかのか?

弾を積んでいなかった?

いや、こんなに重要な局面で、そんな間抜けなことはしないだろう。

整備不良も考えられない。

手加減なんてもつてのほかだ。

そして、自殺願望のような先程の台詞。

それらから考え付くのは、一つしかなかった。

(あいつも、止めてほしかったのかもな……)

思い起こせば、最後のあのミサイル。

あれは、直撃を狙ったものでも、近接信管による爆発でもなかった。だから、ただ機体をロールするだけで回避できた。

もしあれが本気で俺を狙ったものならば、俺は今ここにいないだろう。

(まったく、この勝負、引き分けだよ……相棒)

最後の最後まで真意が分からなかった相棒に、俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

そして、機体をヴァレーへの帰路に向けようとしたとき——急に視界が真っ暗になる。

（ブラックアウト？）

一瞬そう思ったが、そんな生易しいものではない。

少しでも気を抜くと、暗闇の底へと、意識が無理矢理持っていかれそうだった。

まるで、罪人の魂が地獄へと引き込まれるように。

（くっ……体が……まったく動かねえ）

このままでは墜落しかねない機体からバイルアウトしようにも、体が言うことをきかない。

それに、俺は、これまでに人を殺しすぎた。

すべてが終わった今、その裁きを受けるべき時なのかもしれない。

（……悪いな、イーグルアイ……おれは……戻れ……そうに……ない……）

そして、俺は目蓋を閉じ、意識をその闇に委ねた。

1995年12月31日。

クーデター組織“国境無き世界”による大規模なクーデターは、拠点であるアヴァロンダムの陥落、そして核弾頭ミサイル“V2”の消滅により、幕を閉じた。

だが、その最大の功労者である“円卓の鬼神”——ガルド隊の1番機であるサイファアの行方は、一切不明となっている。

CODE : 101 EJECT

「……うん？」

サイファアが目を覚ましたとき、そこは天国でも地獄でもなく、馴れ親しんだコックピット、そして空の上だった。

手元を見ると、しっかりと操縦桿を握り締めている。

どうやら、体に染み込んだパイロットとしての本能が無意識のうちに機体を操っていたらしい。

計器を見ると、機体はちゃんと水平に飛行している。

「とりあえず、無事だったようだ……」

サイファアがそう呟き、周囲を再確認したとき、信じられない光景が目に入ってきた。

「な……海だと!？」

サイファアの機体は、海の上を飛んでいた。

それも、周囲に小島すら見えるだけの海域。

だが、意識が無くなる前に飛んでいたアヴァロンダムは、ベルカの内陸部の山岳地帯に存在するダムだ。

海上を飛ぶどころか、海岸線を見ることがすら不可能な場所。

燃料計を見ても、自分はその戦闘以後、10分も飛んでいないと分かった。

「いったいどういうことなんだ……?」

多大な疑問にサイファアが呟いた直後、通信機から、声が飛び込ん

できた。

《——こちら下地島迎撃基地コントロール。当空域を飛行中の所属不明機、聞こえていますか?》

聞こえてきたのは、オペレーターであろう若い女性の綺麗な声。だが、サイファーは別のことが気に掛かっていた。

(シモジシマ……?)

下地島迎撃基地という名の基地は、記憶に無かった。

少なくとも、アヴァロンダム周域にはそんな名の基地は存在しない。だがとりあえず、自身の所属を相手に伝えようと通信を開く。

「こちらはウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊所属、ガルム1だ」

《……え? すいませんがもう一度所属を言ってください》

所属はしっかりと伝えたはずなのに、返ってきたのは再度の報告を求める声。

別に通信機が不調なわけでもなく、通信はクリアに行なわれている。

(ただの聞き逃しか?)

オペレーターが聞き逃しなどありえないだろうとも思ったが、新人オペレーターなのかもしれない。

「繰り返す。こちらはウステイ——うおっ?」

サイファアが再度所属を伝えようとした時、機体に衝撃が走った。計器を見ると、エンジンが完全に停止している。

どうやら、先の戦闘でのダメージの影響が限界に達したようだ。

なんとか飛行はできているが、今の状態はグライダーのように滑空しているのとは同じ。

空中爆発の心配は無いものの、このままだと機体ごと海面に叩きつけられかねない。

《どうしたんですか！？》

通信機からは、オペレーターの心配そうな声が聞こえてきた。

「少しまずい状況だ。エンジンは完全に停止、コントロールもほぼ不可能……墜ちるのも時間の問題だな」

《エンジン停止！？ 大変じゃないですか！》

サイファアが機体の状況を伝えると、オペレーターは焦ったように言った。

おそらく、こういった経験が少ないのだろう。

《最寄りの飛行場は当基地ですが、距離が20マイル近くあります。辿り着けますか？》

20マイルは、約30キロメートル。

普段なら鼻歌混じりに辿り着ける距離だ。

だが、今の状況では不可能に近いだろう。

「……無理、だな。おそらく半分の距離で墜落するだろう。残念だ

が、機体を捨ててベイルアウトする。救助を頼めるか？」

《分かりました。……どうかご無事で》

「ああ、ありがとう」

通信を終えると、座席下のサバイバルキットを取り出す。

そしてコックピット内に持ち出すものが無いか確認した後、サイフ
アーは緊急脱出装置を作動させた。

CODE : 102 PARTING

無事に機体から脱出し、パラシュートで空中を漂っていたサイファ
ーだったが、彼はおかしいな感覚を味わっていた。

(……暖かい?)

そう、空気が暖かいのだ。
むしろ、暑いと言ってもいいかもしれない。

(……おかしいな)

暖かい海域は、救助が来るまでに凍死してしまう恐れが無いため、
普段なら歓迎するような状況だ。

しかしながら、決してありえない状況でもある。

サイファーが飛んでいたのは、真冬のアヴァロンダム上空。

暖かいとは無縁の状況だった。

先程は海上を飛んでいるということとで内心慌てていたのか気付かな
かったが、こんな海に出るためには南に何千、何万キロと飛ばない
といけないだろう。

(それが、何故……?)

この状況に悩んでいると、遙か前方で大きな着水音と共に巨大な水
柱が吹き上がった。

先程まで乗っていたイーグルが海に墜ちたようだ。

(……ありがとうな)

海底に沈みゆく愛機に向けて、心の中で感謝の念を送る。

これまで何度も共に死戦を戦いぬいてきた愛機だ。

ラリーやPJとは違う、しかしながら甲乙つけがたい位の相棒。

いつか別れがくるとは覚悟していたが、まさかこんな形でやってくるとは思っていなかった。

だが、これはこれでよかったのかもしれない。

冷たい海よりも、暖かい海のほうがまだましな環境である。

（まあ、あの機体がどう感じるかなんて分かりはしないが……）

サイファーがそんなことを考えていると、自身も海面へと接近した。パラシュートが絡まることを避けるため、パラシュートを切り離し、海へと着水する。

パイロットスーツのジャケットのおかげで沈むようなことはなく、海面にプカプカ浮いている状態になる。

同時に、眠気のような感覚が急に襲ってきた。

どうやら、アヴァロン上空での疲れが、ここにきて効いてきたらしい。

（……少し眠っても大丈夫だろうか）

寒い海域であれば眠ることは死に繋がる。

だが、この海域ならその心配はないだろう。

救助が来るまで時間はあるだろうし、問題はないはずだ。

そんな結論を出したサイファーは、ぬるま湯のような海水の温度と日の光を感じながら、ゆっくりと目を閉じた。

CODE : 103 WAKE UP

「やれやれ、困ったことになったものだ……」

天体危機管理機構下地島迎撃基地の一角にある基地司令室。

そこでレイノルズは、文字通り頭を抱えていた。

スクランブルもなく、穏やかな昼下がりに突如出現した所属不明機。所属を聞こうとしたが、返ってきたのはデータに存在しない名称。

そして、所属不明機はエンジン停止を理由に墜落。

沖縄の海の藻屑と化してしまった。

それだけならまだしも、救助されたパイロットが身につけていたのは、今まで見たことがないタイプのパイロットスーツ。

おまけに、所持品にはこれまた見たことの無い拳銃まで含まれていた。

幸いにも救助に参加した人数は少なく、状況を知っている人数は自分を含めてもごく少数ではあるが、基地内では“突如出現した不明機とそのパイロット”の噂で持ちきりである。

「さて、いったいどうするべきか……」

レイノルズが頭を悩ませていると、司令室のドアがノックされた。

「司令、医務室から連絡がありました。パイロットの男性が目覚めましたようです」

聞こえてきたのは、副官でもある如月沙弥華の声。

救助されたパイロット——サイファアの目が覚めたようである。

「そうか、わかった。すぐに行こう」

目を覚ましたサイファーが最初に見たものは、真っ白な天井だった。しばらく惚けたのち、上半身を起こし、周囲を見回すと、ここが医務室であるとわかった。

「……無事に救助されたみたいだな」

そう呟きながら、軽く伸びをする。

そして胸ポケットからタバコを取り出そうとして、自分が下着姿であることに気付いた。

辺りを探しても、タバコどころか身分証すら見つからない。

「……没収されたのか？」

捕虜にした敵兵の所持品を没収するのは別に珍しいことではない。

しかし、それは拳銃などの危険物の場合。

タバコのような嗜好品や、家族の写真などの私物は基本的に没収されはしない。

だが、ようやくサイファーはあることに気付いた。

「……そうか、ここは医務室だ」

医務室は、当たり前だが禁煙だ。

ならば、タバコを没収するのは当然のことだ。

「ちつ、しょうがない。後で返してもらうかな」

そう言いながら、サイファーは目覚めたときのことを思い返す。

(……そういえば、医者つぱいのがいたはずだが?)

目覚めたときにはいたはずの医師がいない。

それどころか、監視の兵の一人もいない。

(どんだけ無防備な基地なんだ、ここは?)

民間基地かとも考えたが、通信で“下地島迎撃基地”と言っていたので、少なくとも民間ではないだろう。

「なら、いったいどういうことなんだ……?」

そう呟いたとき、医務室のドアが開き、先程の医師と初老の男性――レイノルズが入ってきた。

「お目覚めのようだね、パイロット君」

「……誰だ、あんたは?」

サイファーが警戒と威嚇の視線を向けるが、レイノルズはそれに笑顔で答え、言った。

「私の名はロバート・レイノルズ。この下地島迎撃基地の司令だよ」

いきなり指揮官クラスの人物が出てきたことに少し驚きつつも、サイファーは所属と救助の礼を述べる。

ただし、まだ警戒は解かない。

「ウステイオ空軍第6航空師団第66飛行隊所属ガラム1、サイファーだ。まずは、救助してくれたことに礼を言う。ありがとう」

「いやいや、救助を求める人がいれば、それを助けるのが普通だ。それに、礼を言うなら私ではなく実際に救助した人々に言ってくれたまえ」

「……それもそうだな」

少し会話をしただけだが、サイファーはレイノルズか悪人ではないと感じ、少し警戒を緩める。

それを理解すると、レイノルズは医師に退出するように言った。そして、サイファーの目を見ながら、本題を切り出した。

「……ところで、きみは一体何者なんだね？」

「……？ さつきも言ったが、俺はウステイオ——」

訝しげに再度所属を名乗ろうとするサイファーだったが、レイノルズは片手で軽くそれを制する。

そして、一呼吸置いた後、言った。

「申し訳ないが、そのような国や組織は存在しないのだよ」

「……なんだと？」

CODE : 104 EMPLOYMENT

レイノルズの言葉に、サイファーは愕然となった。

「ウステイオが存在しないだど！？ 下手な冗談はやめろ！」

「冗談もなにも、ウステイオなんて国は、今にも過去にも存在しないんだよ」

「そんなことがあるはずないだろう。馬鹿げた嘘をつき続けるならば、容赦はしないぞ！」

サイファーはベッドから飛び降りてレイノルズの胸倉に掴み掛かると、脅迫するかのように締め上げる。

歴戦のパイロットであるサイファーの握力で締め上げられたレイノルズだが、苦しそうな表情をしつつも、言葉をしっかりと放つ。

「……嘘などではないよ。きみの言うウステイオという国は、この世界には存在しないんだ」

「……」

職業柄、サイファーは相手の嘘を見抜く能力に長けていた。相手が嘘をついているかどうかは、目を見ればだいたい分かる。そして、レイノルズの目は嘘を言っていないと示していた。

「……どうやら、ウステイオが存在しないのは、嘘じゃないようだな……」

サイファアはレイノルズから手を離すと、力をなくしたかのようにベッドに座り込んだ。

「……すまない、頭に血が上って冷静さを欠いていたようだ……許してくれ」

「いや、大丈夫だよ……それにしても、この状況はいったいどういうことなんでだろうね」

サイファアとレイノルズは腕を組んで考え込む。
そしてしばらくそうしていた後、レイノルズがふと呟いた。

「……考えられる可能性があるならば、きみが異世界からやってきた存在かもしれない、というくらいだろうか」

レイノルズが言い放ったのは、彼自身も信じきれない可能性。
だが、サイファアはそれを聞いて確信を得たような表情となる。

「異世界……なるほど。それなら、この状況にも辻褄は合うな」

「信じるのかね？　こんな馬鹿げた可能性を？」

「……予測できない馬鹿げた展開なんて、何度も経験したからな」

苦笑しながら、サイファアは過去の経験を思い出す。

多くの友軍機を風呂垢ったレーザー兵器“エクスカリバー”。

ヴァレー基地を襲撃した、空中要塞とも言える重巡行管制飛行航空母“フレスベルグ”。

レーザーポッドや散弾ミサイル、バリア並の電磁妨害機能を搭載した戦闘機“モルガン”。

どれもが予測不可能、そして一步間違えれば命を落とす存在だった。命を落とす心配が無い分、こちらの方が遥かにマシといえるかもしれない。

「俺としては、そんな馬鹿げた可能性を口に出せたアンタが不思議なんだが？」

「……まあ、私にもそれがありえないと言い切れないからね」

異世界なんてものは、普通に考えればSFの中の話で、一般人なら笑い飛ばすような内容だろう。

だが、SFの代表格である宇宙生命体——“スペースシード”の存在を知っているレイノルズにとつて、異世界というものは完全に信じる事が出来なくても、ある程度は信じられる範囲にあるのだ。

「それにしても、異世界か……本当にSFだな」

SFは、小説の題材として世界に溢れている。

特に、異世界はその代表格だ。

サイファーも、そんな小説を子供の頃に読んだ記憶がある。

特に記憶に残っている内容は、1人のパイロットが異世界に飛ばされる話であり——今の自分とほとんど同じ状況だ。

「それで、これから俺はどうなるんだ？ 戸籍も金も無いし、ホームレスか？」

心配そうにサイファーが聞くと、レイノルズは少々考え込み、逆にサイファーに尋ねる。

「サイファー君。きみの職種はパイロットで間違いないのだね？」

「……もちろんだ。まあ、正規の空軍ではなく雇われの傭兵だがな」

「傭兵か……」

「何か問題でも？」

「いや……それだが、現在までの飛行時間は分かるかい？」

「飛行時間？ それは、実戦だけじゃなく訓練も含めるのか？」

「基本的には訓練を基本とするのだが……まあ、両方を合計した時間をお願いするよ」

レイノルズが言うと、サイファーは顎に手をあてて考え込む。

「……少なく見積もったとしても、1万5千時間は飛んでるだろうな」

「1万5千時間!？」

その時間に、レイノルズは驚きを隠せなかった。

1万5千時間とは、単純に計算しても1日10時間の飛行を4年以上毎日続けている計算となる。

もちろんそんな状況はありえないので、現実にはさらに年月がかかるだろう。

「それで、そんなことを聞いてどうするんだ？」

奇妙な質問に、サイファアは首を傾げる。

「いや、なに。きみをこの下地島迎撃基地のパイロットとして雇おうかと思っているだけだよ」

「……なんだと？」

「迷惑かな？」

レイノルズは少し心配そうな顔をするが、サイファアは首を横に振る。

「いや、こちらとしては願ってもないことだ。だが、問題はないのか？」

「もちろんだ。まあ、まったくないといえば嘘になるが、多少の問題はなんとかなるよ」

「そうか……なら、有り難く受けさせてもらう」

「では、契約成立だ。今は書類やきみの身分証がないから、正式な契約は後日になるがね」

「身分証？ 悪いが、俺にはこの世界の身分なんて存在しないぞ？」

「心配する必要はない。数日中には用意するよ」

「用意する、って……」

レイノルズの台詞に、さすがのサイファアも驚き呆れるしかなかった

た。

だが、レイノルズは相変わらず人のよさそうな笑みを浮かべている。

「まあ、いいか。……それで、報酬はどのくらいになるんだ？」

傭兵の本能でサイファーが聞くと、レイノルズはポケットから手帳を取り出し、なにやら計算を始める。

「そうだね……月々の報酬は、だいたいこのくらいになるかな」

示された金額は、基地の正規パイロットの月給より少し高い金額。おそらく、日用品などの購入資金として、少し色を付けてくれたのだろう。

だが、その桁を見て、サイファーは眉をしかめた。

「……桁が2つ程足りないんじゃないか？」

「……は？」

サイファーの言葉に、レイノルズは啞然とする。

そんな彼のリアクションを見て、サイファーは価値観の違いに気付いた。

「……そうか、仕事が違うんだっただな」

傭兵は命を懸けて戦い、時に自分で機体や兵装の購入を行なうため、基本的に報酬が高額だ（特に、エースコンバットの世界では報酬の額が文字通り桁違いである）。

大規模な作戦の勝利に貢献したとなれば、常人なら一生遊んで暮らせる額を超える報酬を手に入れられることも少なくない。

おまけに、敵目標を破壊した分だけ追加報酬が得られるのだから、サイファアの報酬明細の桁は予想ができない。

ただ、数回の出撃でちよつとした戦闘機が購入できることは確かである。

ちなみに、ラリーの愛機として有名なF-15戦闘機“イーグル”のお値段は約122億円。

製造単価でも30億円程であるが、お金に余裕のある方は自家用飛行機として購入してみてもいいかもしれない。

ただし、日本では飛ばせないが。

「すまない、俺の価値観で考えていた。普通の賃金というのは、まったく経験がなくなつてな……」

サイファアの言葉に、レイノルズは、ようやく気付いたかのような表情をする。

無理もないだろう。

戦争も無くなり、軍隊も規模を大幅に縮小したこの世界において、傭兵とはすでに消滅した存在。

知識はあつても、すぐに気付くのは難しい。

「……まあ、しばらくは慣れない物価に苦労するだろうが、金欠にならないように頑張ってくれたまえ」

「金欠……か。一生縁のない言葉だと思っていたよ」

少し落ち込んだような様子のサイファアとは逆に、レイノルズは少し楽しそうにしていたが、腕の時計を見ると、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「サイファア君。私は少し電話をしてくるので、しばらく待ってい

ていただけるかな？」

「どこに電話するんだ？」

少し警戒心を見せるサイファーに、レイノルズは微笑みながら答える。

「なに。きみの下宿先になる場所だよ」

CODE : 105 QUIET NIGHT

その後、サイファアはレイノルズに連れられて下地島基地を後にした。

サイファアはどこに行くのかと尋ねるものの、

「ついてからのお楽しみだよ」と言われるばかり。

先程“下宿先”とレイノルズは言っていたため、基地職員の寮だとサイファアは予測していた。

だが、その予測は大きくはずれることとなる。

「さあ、到着だ。ここが、君の下宿先だよ」

「……料理屋？」

2人がやってきたのは、1軒の料理屋だった。

看板には、“広陳”と書かれている。

レイノルズに促されるままサイファアが店に入ると、1人の女性が出迎えた。

「ロバート、彼が例のパイロットかい？」

「……誰だ、この人は？」

「彼女は御厨リンさん。この広陳のご主人で、私の旧友でもある人だ」

「事情はロバートから聞いているよ。まあ、よろしくたのむね」

「サイファアだ。これから世話になるようだ。……よろしく頼む」

「はいよ。……ラン、ちょっと来ておくれ!」

リンが呼ぶと、厨房らしき場所から若い女性がやってきた。

「この娘はラン。アタシの孫娘だよ」

「御厨ランです。よろしく願いします」

「サイファーだ。こちらこそよろしく」

「さて。ラン、彼を部屋に案内してやっておくれ」

「分かったわ、おばあちゃん。サイファーさん、ついてきてくださ
い」

「分かった」

ランについてサイファーが広陳の2階へと上がると、1つのドアの
前に案内された。

「この部屋を使ってください。長い間使われてなかった1人部屋な
ので少々埃をかぶってましたけど、掃除はしておきましたから」

「すまない、感謝する」

サイファーは部屋に入り、中を見渡す。

部屋の右側には1人用のベッドがあり、左側には机と椅子、そして
小さな棚が並んでいる。

広くはないが、住心地がよさそうな部屋だ。

「あつ、そうだ。サイファーさん、お風呂に入ってきたらどうですか？」

「……風呂？」

「はい。海に脱出したんですよね。髪の毛とか、塩水で大変でしょう？」

ランに言われ、サイファーは体が少々塩臭いことに気付いた。

「そうだな……でも、俺は着替えを持っていないんだが」

「ああ、それは心配しないでいいですよ。ちゃんと用意しますから」

「そうか……なら、ありがたく入らせてもらおう」

案内された脱衣所で服を脱ぐと、サイファーは浴室へと入った。

そしてシャワーで体を流すと、湯槽にゆっくりと体を沈め、温かい湯に浸かる。

「……一時はどうなることかと思ったが、なんとかかなりそうかな……」

眩きながら天井を見上げていると、ガラリと音がして浴室の扉が開かれた。

「うにゃー」

「……猫？」

突如現われた猫は器用に戸を閉めるとそのまま湯槽へと歩み寄り、湯へ浸かる。

その行動に、サイファアは少なからず驚いた。

「古来より猫は水が苦手とよく聞くが……異世界の猫というのは、水に浸かることが平気なのか？」

不思議そうに呟きながらサイファアは猫を眺める。

猫の方かというと、髭をピクピクと動かしながら気持ちよさそうにしている。

「まさか、俺を監視でもしているのか……って、それは考えすぎか」

「うにゃ？」

「……なんでもない。気にするな」

猫は少しの間サイファアに目を向けていたが、すぐに興味を無くしたのか目を閉じてしまった。

サイファアはできるだけ波がたたないように湯槽から出ると、脱衣所に入る。

サイファアの着ていた服は片付けられていたが、代わりに例の着替えらしい服が置いてあった。

着てみるとサイズはぴったりで、着心地も悪くない。

だが、サイファアはあることに気付いた。

「……そういえば、なんでサイズがぴったりの服が用意されているんだ？」

サイファーはしばらく考え込んでいたが、結局何も分かることはなかった。

その頃、広陳に4つの人影が近づいていた。

この広陳に下宿しているパイロット候補生——本庄美風、土井静羽、中村彩雲、菊原香鈴の4人だ。

時間はもはや深夜になりつつあるが、なぜこんな時間になったのかというと、最近元氣のない美風を元気づけるために静羽達が宮古島への買い物に誘ったことから始まる。

宮古島のショッピングモールで和やかに余暇を楽しんでいた4人だったが、そこで基地の教官である佐古浩一郎と藤谷圭、それに同じ候補生の宮沢翼と池田空と遭遇したのだ。

無論、彼らは基地の仲間であり、また帰りは彼らのボートに便乗するつもりであったので特に問題があるはずがなかった。

だが、佐古が酒を飲んで酔っ払っていたことが、大きな問題の原因となる。

酩酊していたために状況が分からない佐古は人の多い場所にもかかわらず大声で美風に説教を始めたのだ。

本人からすれば励ましのつもりだったのだろうが、状況が完全に悪く、美風は言葉に詰まってしまう。

そこから、美風の代わりに言い返した彩雲に翼が食って掛かり、大喧嘩に発展してしまったのだ。

その結果、彼女達は警察のお世話になってしまい、下地島から駆け付けた岩崎和馬と如月沙弥華が引き取りにきた後、帰りのボートや基地で沙弥華から説教を受けることとなった。
そして、この時間になってようやく帰ってこれたというわけだ。

「ただいま戻りました」

疲れ切った表情で店に入った美風達だったが、目の前に知らない男性が現われたことにより表情を硬直させた。

その青年——サイファーも驚いた表情をしている。

「……誰だ、おまえら？」

「「そちらこそ、どなたですか？」」

サイファーと美風達がお互いに見合っていると、リンがやってきた。

「おや、おかえり。丁度よかった。今日からここに下宿することになった、サイファーだ」

リンが紹介すると、美風達は顔を見合わせる。

「新しい人、ですか？」

「でも、なんでこんな急に……？」

「ちょっとした理由があつてね。……ほら、自己紹介はどうしたんだい？」

リンが促すと、美風達は姿勢を正し、自己紹介を始める。

「土井静羽です。よろしく願いします」

「中村彩雲です。よろしく願いします！」

「えっと、本庄美風です。よろしく願いします」

「……菊原香鈴、です」

「サイファーだ。よろしく頼む」

自己紹介を交わし、美風達の顔と名前をそれぞれ記憶していくサイファーだったが、その視線は美風達の顔——というよりも、彼女達の髪の毛へと引き寄せられていた。

（……凄い髪の色だな）

茶髪や白髪は別段おかしくないが、緑や藍色の髪はあまりに不可思議である。

もっとも、“世界”が違えば髪色の常識も違うのであろうが。

「さて、詳しい話は今度にして、美風ちゃん達は風呂に入ってきたな。サイファーは、今日はもう休むといいよ」

「「分かりました」」

「分かった。なら、有り難く休ませてもらう」

サイファアは与えられた部屋へと戻ると、疲れた体を軽く解しながらベッドに座り、窓から見える夜空を眺める。

「……………静かだな」

戦闘機のエンジン音や警報の音どころか、飲んで酔っ払った仲間達が引き起こす騒動の音も聞こえない。
争いのない、静かな夜だ。

「本当に、ここは平和なんだな……………」

ベッドに横になると、サイファアは目を瞑る。

そしてすぐにやってきた眠気に抵抗することなく眠りの世界へと落ちていった。

CODE : 201 NEW FACE

その日、下地島迎撃基地副司令官である如月沙也華はいつものように下地島迎撃基地へと出勤した。

彼女は軽い準備を済ませると、司令であるレイノルズの待つ管制塔へと上る。

しかしそこで、いつものメンバーに混じって計器を見ながら管制官達と話をしている、見知らぬ男性の姿が目に入った。

「おや、沙也華君。おはよう」

「あつ、おはようございます、レイノルズ司令」

レイノルズが声をかけると、沙也華は慌てて挨拶を返す。そして、いつものように紅茶を嗜んでる彼に尋ねた。

「あの、司令。彼はどなたですか？」

「そうか、紹介がまだだったね。サイファー君、ちょっとこっちへ」

沙也華が尋ねると、レイノルズは男性の方へ声をかける。

その声に、見知らぬ男性——サイファーは彼の元へと歩み寄った。

「沙也華君。新しくこの基地に配属された、サイファー・“フォルク”君だよ。そしてサイファー君、彼女がこの基地の副司令を務める、如月沙也華君だ」

「サイファーだ。よろしく頼む」

「如月沙也華です、こちらこそよろしくお願いします」

2人は互いに挨拶を交わし、握手をする。
と、レイノルズが思いついたように言った。

「そうだ、沙也華君。彼にこの基地を案内してやってくれないか？」

「え？ あ、はい。分かりました」

「よろしく頼む、如月教官」

そう言うと、サイファアと沙也香は管制塔を後にした。

サイファアがこの“世界”に来て3日が経過した。

この3日で、レイノルズはどうやったのか仮のものながらサイファアの戸籍等の登録書を用意した。

そしてその間、サイファアはリンとレイノルズからこの世界の常識や状況、そして下地島基地で働くために必要な知識を叩き込まれ、完璧とまではいかないものの必要な情報を手に入れることができていた。

ベイルアウトした理由だが、“下地島迎撃基地への移動を兼ねた、新型迎撃機開発のための極秘試験飛行中にエンジントラブルが発生し、墜落。通信での不明瞭な会話はその衝撃で一時的に気絶していたことによる混乱”という理由になった。

少々厳しい理由であるが、基地司令であり人望もあるレイノルズの説明であつたため、どうにか受け入れられた。

現在の名前も、本来はサイファアの本名で登録すべきだったのだが、なぜかサイファアが本名を語りたがらなかったで、この名前となった。

ちなみに、仮の苗字であるフォルクは、苗字が無いと登録が出来ないということでサイファアが最初に思いついた苗字だ。

もちろん、それは相棒であつたラリー・フォルクの名からとられている。

「はい。フォルク教官は——」

「ああ、すまんが俺のことはサイファアと呼んでくれないか？ フォルクというのは慣れなくてな」

沙也華がサイファアの名を苗字で呼ばうとすると、サイファアはそれを遮った。

やはりフォルクの名は偽名であり、また私情的なものも関わってくるため、慣れないというか感じが悪いのである。

「え？ あ、はい。それじゃあ、サイファア教官とお呼びすればいいですね？」

「ああ、それで頼む」

そんな会話の後、サイファアと沙也華は1つずつ基地施設を見て回り、そこで働く職員達へと挨拶していった。

そして基地内部の案内が終わると、2人は外へと出る。

広い滑走路に面するエリアに出ると、下地島特有の海風と太陽の光、そして海の匂いが2人を出迎えた。

興味深そうに滑走路を眺めるサイファアに、沙也華は尋ねる。

「どうですか、サイファー教官。この基地は？」

「ん？ ああ、悪くないな。自然は多いし、基地施設も立派なものだ。まあ、少々暑いかな」

沙也華の質問に、サイファーは正直に答えた。

“前の世界”で所属していたヴァレー航空基地は、周囲に木々はほとんど存在せず、施設には老朽化と戦闘の傷跡の残り、そして極寒とまではいかないが気温のかなり低い環境の中に存在する。

その意味で言うと、この下地島基地はヴァレー基地とは正反対の基地であるといえるかもしれない。

「あはは、そうですね。ここは各基地の中でも一年中暑い場所にありますから、気候に慣れないと大変ですよ？」

「ふむ、そうなのか？」

サイファーは少し複雑そうな表情を浮かべる。

一年中寒い気候であったヴァレー基地に慣れた彼の体は、しばらくの間この環境に苦勞しそうである。

それにこんな気候だと、帰還後に仲間達と飲んでいたホット・ラムやホット・ワインなどを楽しめなくなりそうだ。

しかしながら、冷えた酒も久々で良いかもしれない、とサイファーは心の中で思う。

「じゃあ、次は格納庫に案内しますね」

そう言って、沙也華はサイファーを格納庫の方へと案内した。滑走路脇には、迎撃機を収納するためであろう巨大な格納庫が幾つか並んでいる。

「ここが、格納庫です。まあ、見れば分かりますけどね」

そう言うと、沙也華は格納庫に向かって呼びかける。

「佐古先生、いますかー!？」

沙也華が呼びかけると、作業服を着た中年の男性が出てきた。

「どうしたんです、如月先生……おや、そちらの人は？」

「こちらは新しく赴任されたサイファー・フォルク教官です」

「ああ、例の新任の教官ですか。あ、整備主任の佐古浩一郎です」

「サイファー・フォルクだ。よろしく頼む」

佐古と挨拶を交わすと、サイファーはその背後に位置する航空機へと視線を向ける。

(TSR・2にYak-28か……)

格納庫に並べられていたのは、2種類の機体であった。

迎撃機として使用されるTSR・2MS、そしてその訓練に使用されるYak-28MSTである。

この2機は、サイファーのいた世界では開発中止、あるいは少数が生産されたのみで既に退役している機体であった。

おそらくマイナーチェンジを繰り返したものであるだろう、コクピット部分やキャノピー、尾翼付け根のエンジン等に差異が見られる。

（少々珍しいコクピットタイプだな……これも、慣れるまで時間が掛かるやもしれんな）

そう思いつつ隣の格納庫に目をやると、サイファアの目にあるものが飛び込んできた。

（なんだ、あれは……？）

それは、シートを被せられた巨大な機体であった。

組み立て途中なのか、各部のパーツははずされ、そこいらに転がっている。

しかし、その巨大なエンジンは機体の推力の大きさを物語っていた。サイファアがその機体を眺めていると、基地にチャイムが鳴り響く。

「あつ、いけない。次は講義があるんだった！ サイファア教官、職員室に戻りますのでついてきて……」

沙也華はそう言って駆け出そうとするが、サイファアは隣の格納庫内の機体に目を奪われている。

「サイファア教官？」

「っ！ すまない、すぐに行く」

沙也華の声に、サイファアは慌てて彼女の後を追う。

去り際に、サイファアはもう一度格納庫へと目を向ける。

パーツが欠け、シートに包まれた状態ながらも、その存在感を示し続ける巨大な姿。

その姿が、なぜか目に焼きついて離れなかった。

「えー、発表させて頂きます」

高級そうなスーツを着込んだ、眼鏡の男が演台に立つスクリーンに
大寫しになった。

これは重要な会見の記録映像のようで、演台の上には様々な放送局
のマイクが束ねて設置されている。

会見は英語で行われているが、スピーカーからは吹き替えの日本語
音声も流れている。

神妙な口調で切り出した男に、観衆の注目が集まった。

「各国の協力により集められたデータを各分野の専門家によって分
析した結果、これより五十年の後、人類ががかって無い未曾有の危
機に晒されることが判明いたしました。我々が作成したシミュレー
ション映像ををご覧頂きたい」

男がそこで一旦言葉を切ると、画面はシミュレーション映像へと切
り替わった。

スクリーンに映しだされたのは、太陽を中心に地球や火星などの大
小多数の天体が周回している太陽系の図。

その中に、無数の隕石が川の流れのようになだれ込んでいく。

「これは地球のみならず、地球を含む太陽系が巨大かつ広大な規模
の隕石群の中へ突入するという事態です。そうなれば恐らく無数の
流星が地球を襲い、市街地への隕石の落下はもとより、異常気象・
地震・津波といったあらゆるカンスクエント、天変地異が発生する
ことが予想されます」

シミュレーション映像はさらに進み、スクリーンには雪に覆われた南国の島や巨大な津波に吞まれる都市を映し出されていく。そしてシミュレーション映像が終わると、再び演台に立つ眼鏡の男へと映像が切り替わった。

「これに対し国連は、地球上の生命の存続を賭し、ここに、人類全ての総力を結集した“天体危機管理機構”の設立を宣言いたします」

「——はい。この国連事務総長の宣言により、今から約五十年程前、我々の組織の前身であるSS機関が発足したわけです」

沙也華の操作でスクリーンに映し出されていた演説の映像が途切れ、代わりに授業用の様々な図表が映し出された。

ここは、下地島迎撃基地の施設内に存在する授業用教室。

現在は美風達の在籍する組の授業中である。

美風達が授業を受ける後ろでは、サイファーが見学ついでに講義を聞いている。

「当初は地球から直接大気圏外へ上昇し、飛来する隕石を迎撃する機体の開発が進められていました。しかしながら、この迎撃システムには安全性とコスト面に大きな問題があることが判明し、今から二十年前、SS機関は組織を二分する決断を下しました」

（おや？ あれは……）

沙也華の言葉と共にスクリーンへと映し出された機体のデータ画像を見て、サイファアは格納庫で見た機体を思い出した。
見た時間は短く、シートが被せられていたため詳細は分からなかったが、大体の輪郭と構成パーツに共通点が多く見受けられる。

「あれって……」

「佐古先生のところにあるやつだ……」

彩雲と静羽も同じ考えに至ったのか小さく呟いた。
そんな3人の心情にお構いなく、沙也華の講義は進められていく。

「——結果、地球の軌道上で隕石を迎え撃つコメットブラスターと地上で迎え撃つメテオスイーパーが誕生したわけです。つまり、大気圏を挟んで外と内に分かれたことになります」

沙也華の講義を聴きながら、サイファアは脳裏で隕石を敵爆撃機に、コメットブラスターとメテオスイーパーをそれぞれ航空機部隊と対空地上部隊に、そして地球を味方の基地へと置き換えていた。

（つまり、^{コメットブラスター}航空部隊が敵を撃滅できればよし。できなくても^{メテオスイーパー}対空地上部隊が食い止める、か……メテオスイーパーはまるで尻拭いだな）

そうサイファアが考えていると、沙也華の声に混じって小さく声が聞こえた。

サイファアが声のした方に目を向けると、静羽が隣の席に座る美風に向かって小さく、しかしながら繰り返し美風の名を呼んでいる。
その目線の先に存在するのは、講義を行う沙也華でも授業内容の映し出されたスクリーンでもなく、窓の外に広がる空だった。

そんな美風の様子に沙也華はまだ気づいておらず、講義を進めてい

る。

「“コメットブラスター”の基地であるオービタルステーションは現在7つまで存在し、地球の衛星軌道上に静止衛星として浮かんでいます。各ステーションにはそれぞれ6基のカタパルトが装備されており、非常時には同時に3機のコメットブラスター機を射出することが可能です」

「……美風。美風！」

ノートも取らずにボーっと外を眺め続ける美風を授業に集中させようと、静羽は何度も彼女の名を呼ぶ。
しかし、ついに美風が授業に集中する前に沙也華に気づかれてしまい、沙也華の視線が美風へと向けられた。

「——また、“フェイス・ワン”、我々で言うところの“第一警戒態勢”が発令されると、ステーションは彗星が飛来する方向に対し垂直な姿勢に向きを変え、左右に設置されているシールドを展開します。このシールドは彗星破碎後の破片からステーションを守る為に装備されているのですが……」

沙也華は、講義内容を話しながらもゆっくりと美風の元へと歩み寄っていく。

「……美風。美風ったら！」

沙也華が近づいてくるのを見て、最後のチャンスと言わんばかりに先ほどもよりのほんの僅かに声量を上げて静羽は美風の名を呼ぶ。
しかし、とうとう美風が気づくことも無いまま沙也華が彼女の元へと到達した。

「そんなに外が気になるなら、ゆっくり見てきていいわよ」

声をかけられて漸く美風は沙也華の姿に気付く。

だが、時既に遅く沙也華の手にはピンク色のカードが掲げられていた。

「あ、あはは……」

「……駄目だった」

美風は引き攣った笑みを浮かべ、静羽はこの結果に肩を落とす。

ピンクカードとは、飛行訓練を受けるパイロットの訓練生達が、教
程項目をクリアできなかった際に、担当教官がそれぞれのパイロッ
トの成績ファイルに挟みこむピンク色のシートのことである。

天体危機管理機構ではシートからデータチップへと変更され、罰則
を受けた候補生はキーホルダーのように束ねて携帯することが義務
付けられていた。

それに加えて下地島迎撃基地には独自の懲罰システムを採用してい
る。

それは、“ピンクカードを受け取ったものは、反省の意味で滑走路
を駆け足で1往復しなければならない”というものだ。

たかが1往復と思うかも知れないが、航空機の離陸・着陸に使用さ
れる滑走路の長さは数キロメートルにも及ぶ。

そしてこの下地島迎撃基地の滑走路も例に洩れず、直線距離で3キ
ロメートルもの長さを持っている。

それを1往復——つまり6キロメートルもの距離を駆け足で、しか
も炎天下の中で往復しなければならないのだ。

マゾヒストでも無い限り、一度やれば二度とやりたくない苦行であ
る。

しかし、美風はその苦行の常連とも言える人間だ。

それは、彼女のカバンにぶら下げられているピンクカードの数が雄弁に物語っている。

その束にまた1つピンクカードを付け加えると、美風は罰則を実行に移すためサイファアの前を通り過ぎ、心なしかふらついた足取りで教室を出て行った。

「どうも、先ほどはお見苦しいところを……」

授業後、サイファアと沙也華は管制塔へとやってきていた。

そこで、なぜか管制塔の中央においてあるソファアに座りながら、レイノルズの淹れてくれた紅茶を呑んでいる。

そのレイノルズは小用があるとのことである。現在席をはずしており、管制塔の職員もちょうど休憩時間であるため、今日の当番である向井塔子を除いてここにはいない。

「先ほど？ …… ああ、本庄美風のことか」

サイファアが言うと、沙也華は管制官の座る座席に腰掛け、美風がこの基地に来た時のことから現在の状況にいたるまでのことを、ポツリポツリと話し始めた。

「彼女がこの基地に来た頃は、態度も成績も悪くない、模範的生徒だったんです。でも、最近は……」

「ずっとあんな状態というわけか」

サイファーが言うと、沙也華は頷く。

「何かに悩んでいるというより虚無感に苛まれているみたいなんですけれど、その理由が分からないのでどうすることも出来なくて…」

そう言うと、沙也華は小さくため息を吐いた。

鬼教官として美風達に恐れられている沙也華だが、その実は誰よりも彼女達のことを気にかけている人物なのである。

彼女達に厳しくするのも、その愛情の裏返しと言えるだろう。

「彼女も、何かきつかけさえあれば変われると思うんですけどね…」

「きつかけ、か……」

そう言いながらサイファーは管制塔の窓の外を眺める。

その視線の先には、罰則の駆け足往復を終えたいらしい美風が滑走路の黄色いエンドラインを見下ろすように突っ立っていた。

「この天候下でランウェイを走りきる根性があるのなら、こんな状況になる前に何とか出来そうなものだがな……」

そんなサイファーの呟きに沙也華は小さく苦笑することしか出来なかった。

その日も、広陳はいつもどおりの朝をむかえていた。

リンとランは厨房の仕込を行い、朝支度を終えた“3人の”候補生達が下地島迎撃基地へと出かけていく。

そして、残った1人が2階から下りてこないまま時は過ぎていく。店内に据え付けられた壁時計の針は、一刻一刻と始業の時間へと近づきつつあった。

「……まったく、またあの娘は寝坊かい」

リンはそう呟くと、本日は遅めの出勤であるため開店準備の手伝いをしているサイファーに向かって言った。

「サイファー、美風ちゃんを起こしてきておくれ！」

「俺がか？……仕方ない、了解した」

そう言っただけでサイファーが2階への階段を上ろうとすると、後ろからついてくる足音が聞こえた。

振り向くと、1匹の太った猫——テイトクが彼の後ろをついてきている。

「ウニャー」

「なんだ、テイトクか。手伝ってくれるのか？」

「ウニャ」

まるでサイファアの言葉を理解しているかのように頷くと、テイトクはサイファアを追い越して階段を上っていく。
その動きは、彼女の体型には似合わない軽快なものだ。

「よくもまあ、あんな体型で……何か特殊な訓練でもしているのか？」

そんなことを呟きながら、サイファアは2階の下宿部屋へと歩いていき、美風と静羽が下宿する部屋の前に立ち止まった。
数回ノックを試みるが、部屋からの反応はない。

「まだ寝ているようだな……」

「ウニャー」

「仕方ない。入るぞ」

サイファアは扉を開け、テイトクと共に部屋に入る。

広くも狭くもない部屋の右側、2段ベッドの下段に美風は寝ていた。その口の端からは涎が垂れ、一応年頃の乙女である彼女には似つかわしくない寝姿である。

サイファアは美風を起こそうとして、壁に貼られているポスターに気づいた。

「……ほう、イーグルか。なかなかいい趣味をしている」

ポスターには、F-15C“イーグル”が描かれていた。
愛機を好きでいる人間がいるというのは、なんとなく悪くない気分である。

「さて、さつさと起こすか……おい、起きろ本庄」

サイファーは眠っている美風に声をかけるが、彼女はもごもご何かを呟いただけで目を覚まさない。

テイトクもペシペシと布団を叩くが、それでも起きる様子はない。

「……ふむ」

何かを思いついたように呟くと、サイファーは徐に足元のテイトクを抱き上げた。

そして、そのままテイトクを眠っている美風の真上１メートル程度の位置に移動させ――

「そらよ、つと」

落とした。

「ぐえっ!?!」

腹部にテイトクの直撃を受けた美風は、潰れたカエルのような声を出した。

人々にオヤツを貰い続けた続けた結果、十数キロもの重さを誇るデブ猫となったテイトクの直撃を受けたのだから、仕方ないだろう。むしろ、それにより別の意味で眠りにつくことがなかっただけでも褒めていいくらいだ。

「ゲホッ、ゲホッ……い、いったい何なの？」

咳き込みながら美風が腹部の辺りを見ると、どこか機嫌の悪そうな顔でテイトクが乗っているのが見えた。

そしてベッドの横には、サイファアの姿も見える。

「テイトク……それに、サイファア教官？」

「よお、起きたか」

「ウニャー」

軽く右手を上げるサイファアと、同じく右前足を上げるテイトクを見て、美風はポカンという表情をする。

「えっと……一体何ですか？」

「時計見る。寝坊してるぞ、本庄」

「えっ……ってああ!？」

ようやく、美風は自分が寝坊していることに気づいて大声を上げる。

「それじゃあ、さっさと準備して出発しろよ。時間は待ってくれないぞ」

そう言うと、サイファアはドタバタと騒がしくなった部屋を後にした。

ちなみに、美風は結局授業に遅刻してしまい、沙也香から罰としてランウェイ2往復を言い渡される結末となった。

太陽がちょうど真上に昇る頃である昼時。

中華料理屋である広陳は、この時間帯に慌ただしさの最初のピークを迎える。

「はい、Aランチお待たせ!」

「Bランチ大盛りと餃子ひとつ!」

「はい、ただいま!」

「Aランチ大盛りおひとつ、Bランチ麺のセットでおひとつですね?」

看板娘であるランと、下宿人である静羽、彩雲、香鈴の計4人が料理の載った皿や食べ終わった皿を抱えて店内を行き交っていた。

客から注文を受け、その注文を伝える間に他の客が食べ終え、空いたテーブルを片付けている間に料理が完成し、料理を届けている間に新たな客が入り、その客から注文を受け取っている間にまた他の客が料理を食べ終える。

この繰り返しだが、下地島でも有数の繁盛店である広陳の日常的な風景であった。

4人は半ば条件反射的に受け答えを交わし、店内を駆け回る。しかし、その中に美風の姿はない。

「オーダー、Aランチ5、Bランチ3、Cランチ4と餃子3枚です!」

「はいっ! こりゃまさに猫の手も借りたいよ!」

たった1人でありながら見事な手際で次々と料理を作り上げていくリンがそうばやく。

ちなみに、手を借りたいと言われているネコのテイトクは、皿を運ぶ香鈴を追い掛け回して店内を走り回っている。

おそらく、彼女なりに香鈴を叱咤激励しているのだろう。

ネコ嫌いの香鈴にとっては、地獄の追いかけっこに他ならないようではあるが。

「静羽ちゃん！ 悪いけど厨房入っとくれ！」

厨房から、店内の喧噪に負けない大声でリンが叫んだ。

「はい！」

「はい、って……アンタ、大丈夫？」

両手に皿を抱えながら屈託無く応えた静羽を、彼女と同様両手に皿を抱えた彩雲が聞き咎めた。

しかし静羽は自信ありげな笑顔を見せると、手にしていた皿を全て片手に移す。

そしてポケットから証書入れを取り出し、幾重にも交互に折り畳まれたそれをぱらぱらと開いて見せた。

「ほら、上から三番目」

彩雲は静羽に促されるままに視線を移し、そしてそれに気付いた。

「特級厨师？ アンタいつの間に……」

「へーん。本場もんでしょ？ 通信講座でゲットしたの。これか

らは、資格の時代だもん」

訝しげに言う彩雲に対し、問われた静羽は得意顔で開いた資格入れを片手で器用に折りたたみ、満面の笑みを見せた。

ちなみに、特級厨师とは1988年に“飲食服務業業務技術等級標準”が公布されるまでに与えられた国家資格の中で、中国料理調理師の最高位のことである。

その称号は、まさに中国料理調理師の憧れの的と言ってもいいだろう。

なお、特級厨师の称号を取得するには5級厨师と呼ばれる位から2年に1度に行われる試験をクリアしていく必要がある、どれほど優秀な料理人でも12年はかかる狭き門である。

間違っても、10代の若者が通信講座程度で取得できるようなものではないはずなのだが……

「おい、俺等の注文まだかよ」

彩雲達が話していると、傍らのテーブルから苛立ち混じりの声が投げられた。

その声の主は、彩雲達と同じ準正規パイロットのの空だった。

反対側には、翼の姿もある。

下地島迎撃基地内にも食堂はあるのだが、この広陳に昼休みを利用して昼食を食べに来る基地関係者は意外と多い。

その最大の理由は、メニューの種類とその味である。

無論、接客用のチャイナドレス姿で給仕をする美少女達の姿を拝むためにきている人間も少なくはない。

「……見て分かるでしょ？ 身内なんだから、協力してよ」

「もう、黙ってたら晩飯になっちまうよ！」

静羽の言葉に対し、不服そうに翼は不平を漏らした。

“晩飯になる”というのは聊か大袈裟すぎるが、この状況だと昼休みが終わってしまう可能性も否定できない。

「だって、美風もまだだし……」

彩雲はそう言いかけて、何の言い訳にもなっていないことに気づいた。

そしてその言葉に、空が頬杖をついたまま忌々しげに答える。

「ああ、アイツならランウェイでポケットと突っ立ってたぜ。まったく、何考えてんだか……」

「え……？」

空の言葉に、彩雲の表情が硬化する。

そんな彼女の表情を知ってか知らずか、空はさらに言葉を続ける。

「緊張感たんねえんだよ。まだ補欠だっていっても、地球を守る大事な使命があるってのに……」

そんな空の冷たい言葉に、彩雲は語気を荒げて言い返す。

「いい加減にしてるつもりはないわよ！」

「自覚がたんねえって言うてんだよ！　うちの基地だけでなく、上に上がりたい奴はごまんといえるんだ。ボヤボヤしてっと、他の候補生達にアツという間に抜かれちまうぞ！」

空の言ったことは、確かな事実。

だが、それは少々ひどすぎるとも言える糾弾だった。

そんな空の指摘に、事実だと内心では理解している彩雲は悔しげに唇を噛み締めるしかできない。

睨み合う彩雲と空、そして傍観者と成り果てた翼の間に冷たい沈黙が降りる。

「彩雲ちゃん、お願い」

「あつ、はい！」

そんな沈黙を打ち破るかのように、ランの彩雲を呼ぶ声が聞こえた。その言葉に、彩雲は声高に応えて何事も無かったかのように厨房へと駆け込んでいく。

「あ、俺らの注文……」

それまで黙って二人の睨み合いを見守っていた翼が慌てて注文を伝えようとするが、それは店内の喧騒にまぎれて届くことはなかった。届いていたとしても、彼女が彼らの注文を受けることはなかっただろうが。

「……おまえが余計なこと言うからだぞ！」

「何が余計だよ」

「これじゃあ、地球の危機の前に俺等の昼飯の危機だ……」

「……おまえも、十分緊張感無いよな」

肩を落としてテーブルに突っ伏す翼の姿に、空はそう言っ
て溜息をこぼした。

広陳が喧騒に包まれている頃、美風は広陳とは離れた“フタウサギバナタ”に来ていた。

フタウサギバナタは海に面した高台にある展望台で、“船を見送る岬”という意味を持つ。

下地島迎撃基地からも、そして広陳からも程近いここは美風がよく来る場所だった。

「はあ……」

ボンヤリと海を眺めていた美風は、深く溜息を吐くと背後のサシバ像に振り向き、背中を柵に預ける。

「アンタは飛べないんだねえ……」

巨大な翼を遙か大空にむけて広げる、サシバを模った巨像。

その右の翼は、数年前に彗星の破片により破壊されてしまい今もそのままである。

美風は、片翼を失い飛ぶことのできないその姿を、美風は自分と重ねていた。

「……そうだ！」

何かを思い立った美風は、大量のピンクカードがぶら下がった鞆の

中を探り始める。

そして基地で書かされた反省文を1枚取り出すと、何やら作業を始める。

「……できた」

そう嬉しげに呟いた美風の片手には、1つの紙飛行機があった。

「代わりに飛ばしてあげる！」

それは、翼を失い飛べなくなったサシバ像への励ましだったのかもしれない。

あるいは、その励ましは今の自分自身に対するものだったのかもしれない。

だが、彼女の考えがどのようなものであったとしても、それは彼女にとっての1つの未来を暗示させるものだったのだろう。

澄み渡った青空の下、美風は腕を一杯に伸ばして紙飛行機を振りかぶる。

「行っけえー！」

美風の手を離れた紙飛行機は、潮風に吹かれて真っ直ぐに飛んでいく。

その姿を見て、美風の表情に喜びが浮かぶ。

だが、順風に飛んでいたように見えた紙飛行機の姿が唐突に揺れた。

「あ……」

それが風に煽られたのだと気づいた時にはもう遅かった。

紙飛行機は、機首を翻して美風の方に向けていた。

「え……！？」

風に煽られた紙飛行機は、その勢いを受けて美風に突っ込んでくる。気がつけば、その先端が美風の顔面へと肉薄して来ていた。

「うわっ！？」

思わず仰け反り尻餅をついた美風の頭上を、勢い良く紙飛行機が通り過ぎた。

その勢いのままサシバ像へと衝突した紙飛行機は、紙の潰れる微かな音を立てて落下する。

呆然とした瞳で美風が紙飛行機を見ると、その先端が歪に拉げていた。

「……はあ」

結局自分は飛べないのか。

そんな感情をため息と共に吐き出した美風に、後ろから声をかける者がいた。

「……こんなところで何をしているんだ、本庄」

「え……？」

美風が振り向くと、サシバ像の向こう側からサイファーが歩み寄ってくる場所だった。

「サイファー教官、どうして……？」

「昼休みついでに、ちょっと島の散策をな」

そう言いながらサイファアはサシバ像の脇を通り過ぎ、その足元に落ちている紙飛行機に気がついた。

「……なんだ、これは？」

「あ、それは……」

サイファアが紙飛行機を拾い上げるのを見て、美風は慌てた表情になる。

先端が拉げているそれは、どう見ても飛ばすのに失敗したものであるからだ。

「まったく、こんな折り方じゃ飛ぶものも飛ばないぞ……見てろ」

「え？」

ポカンとする美風を無視してサイファアは紙飛行機を開くと、それに書かれている文面を気にする様子もなく改めて紙を折っていく。その折り方は、美風のものとは違う。

「……よし、出来た」

完成したのは、元の紙飛行機とは違う形状の紙飛行機。

その出来栄えに満足そうに頷くと、サイファアは紙飛行機を片手に構え、海の方を見つめる。

そして数瞬の後、サイファアの背後から海に向かって風が吹いた。

「そらっ！」

風が吹いたタイミングを逃さず、サイファーは紙飛行機を飛ばした。紙飛行機は、風を背に受けるようにして乗りぐんぐんと上昇していく。

その姿は、美風の紙飛行機とは比べ物にならないほど優雅で、そして力強かった。

「すごい……」

美風がそう呟いた直後、また新たな風が吹いた。

その風に煽られた紙飛行機は、先程と同じように今度はサイファーへと突っ込んでくる。

しかし、サイファーは慌てる様子もなく2本の指でそれを簡単に捕まえた。

「……さて、お前は どうしてこんなところにいるんだ？ 確か、広陳での手伝いがあるはずだろう？」

「えっと、それは……」

サイファーの言葉に、美風は何も答えることができず黙り込んでしまった。

そんな美風の様子に、先日沙也香から彼女の現状を聞かされていたサイファーは何か話してやれないかと考え込む。

そして数瞬の後、サイファーは美風の下宿部屋で見たポスターのことを思い出した。

「……本庄、イーグルは好きか？」

突然のサイファーの質問に、美風の顔に困惑の表情が浮かぶ。

「え？ ……はい、まあ」

「そうか……」

美風の答えに小さく頷くと、サイファーは続けるように話し始めた。

「イーグルは、たとえ片方の翼を失っても飛行することが可能だ。その性能は、まさに“イーグル（鷲）”の名を冠するに相応しい。だが、一番重要なのは機体性能じゃない。なんだか分かるか？」

「えっ？ えっと……分かりません」

そんな彼女の瞳を見ながら、サイファーは言った。

「一番重要なもの。それは、パイロットの意志だ」

「パイロットの、意志……？」

首を傾げる美風に、サイファーはゆっくりと話を続ける。

「片翼を失った時、パイロットが飛ぶのは無理だと思い込んでしまえば、イーグルはただの鉄の塊と化す。だが、飛べると信じ続けていれば、イーグルはそれに応えて飛び続ける」

「……」

「自分を信じて、もう少し足掻いてみる。ベイルアウトするのは、最後の最後でいいだろう」

言い終えると、サイファアは紙飛行機を美風に手渡した。

「あまり難しく考える必要はない。今は理解できなくても、理解できる日はきつとくるさ。……それがいつになるかは、本庄、お前次第だな」

「アタシ、次第……」

「そう、お前次第だ」

「でも、アタシは……」

美風は、俯いて言葉を濁した。

現在、美風はメテオスイーパーの資格を取るべく下地島迎撃基地にいる。

しかし、それは自分自身の意志ではないのだ。

両親がパイロットであり、比較的裕福な家庭に生まれ育った彼女の周囲には多くの大人達が存在し、彼女は事あるごとに彼らからちやほやされていた。

そんな中で美風は、大人達からどうすればより好意的に見てもらえるかを自然と学んでいた。

それが、大人の言うことには素直に従うことである。

そして、美風は両親の勧めるままにメテオスイーパー試験を受け、準正規パイロットとして下地島迎撃基地へと配属された。

しかし、この場所には彼女を誘導し、特別扱いする人間はいない。それが彼女の心、そして彼女の存在意義に大きな不安を与えている。“自分次第”というのは、彼女にとって体験したことのない大きな障壁とも言えるのだ。

「……」

「……やれやれ」

黙り込んでしまった美風の頭を、サイファーは軽くポンポンと叩いた。

そして、まるで妹にでも言い聞かせるように語りかける。

「お前次第と言っても、別に1人で決める必要はないさ。お前には信頼できる友人がいるだろう？ それに、お前達みたいなヒヨつ子を導くために、俺達みたいな大人がいる。だから、頼れ」

「……頼る……サイファー教官を？」

顔を上げ、きよんとした視線を向ける美風に、サイファーは少々照れくさそうに頬を掻いた。

「あー、別に俺である必要はないぞ？ 土井達や如月の方がお前達を知っているだろうし、レイノルズ司令やリンさんのほうが人生経験豊富だしな」

「……まあ、それは当たり前ですよ。サイファー教官とは、出会ってまだ数日ですし」

そう返してきた美風の言葉に、サイファーは小さく苦笑いを浮かべる。

「ハハ、そりゃそうだがな。そんなことより、早く広陳に戻ったほうがいいぞ。……いや、この時間帯だと基地に戻ったほうがいいか」

「分かりました。……サイファー教官はどうするんですか？」

「俺は少し一服してから基地に戻る。だから、先に戻っつけ」

「はい」

そう言つて美風は立ち去ろうとするが、途中で立ち止まり、サイファアの方を振り返った。

「あの、サイファア教官」

「なんだ？」

「……頼つても、いいんですね？」

「ああ、俺で良ければな」

そうサイファアが言つと、美風は小さく頷いて早足で展望台から去つていく。

その表情は少し——本当に少しだけだが、軽くなっていたように見えた。

それを見送つた後、サイファアはポケットから取り出したタバコを口にくわえ、オイルライターで火を点けた。

そして不味そうに煙を吐き出すと、ほとんど減っていないにもかかわらず、それを携帯灰皿へと捨てる。

「……似合わないことは言うもんじゃないな、やっぱり」

そう言つと、サイファアはサシバ像を見上げる。

「右の翼が欠けた鳥、か……」

共通点は、右の翼が欠けているだけ。

それなのに、どうしてもラリーを——右の主翼を失いつつも無事に帰還したことから、“片羽の妖精”とよばれていた相棒を重ねてしまふ。

「ラリー、おまえならどんなアドバイスをあいつにやれたんだろうな……」

思わずサイファはサシバ像に問い掛ける。

だが、サシバ像は何も答えず、ただ大空に目を向けるだけであつた。

CODE : 203 RED ALERT

この日、下地島は雲ひとつないと言えるような快晴だった。

青空という言葉をそのまま映したような蒼い空の下、潮風が海の匂いを運び込む。

だがこの日、平和をそのまま表したようなこの島にもピリピリとした空気が流れていた。

沖縄の紺碧の海に面した下地島迎撃基地。

普段は訓練機のジェット音くらいしか聞こえないこの基地に、けたたましいサイレンが鳴り響いた。

「ヒトサンマルマル時。只今を持ちまして、天体危機管理機構下地島迎撃基地は第二警戒態勢に入ります」

「うむ」

沙也華の報告に、レイノルズは神妙な面持ちで頷いた。

いつもの穏やかな表情はどこかに消え、真剣で凛々しい表情を浮かべている。

レイノルズの雰囲気感化されたかのように、沙也華も真剣な表情を崩さない。

だが、そんな彼女に向け、サイファーが待機メンバーが書かれたリストを片手にランウェイの一点を眺めつつ言った。

「おい、如月教官。確か、今日の待機には本庄達も入っているんだよね？」

「ええ、そうだけど……それがなにか？」

サイファアの問いに、沙也華はその表情を少し崩してそう答えた。この下地島迎撃基地では、レイノルズの“若者にも経験を”という考えの元、パイロット候補生達にもバックアップの2番機以降ではあるが待機メンバーとして組み込まれる機会が与えられている。これは、貴重な実戦経験を積むこと以外にも大きな利点が存在している。

コメットブラスター試験を受けるためにはメテオスイーパーとしての一定数以上の出撃経験が必要条件の1つとなっているため、将来的にコメットブラスターを目指すパイロット候補生達にとっては実戦経験と同等以上の価値があるのだ。

無論、そのポジションに付くまでにはある程度の成績を示す必要があるため、このポジションもある意味“狭き門”となっているが。そんな条件下において、3番待機とはいえ最近成績が不振な美風が組み込まれたのにはちよつとした理由があつた。

サシバ像前での会話の翌日、サイファアが美風に実戦の空気を体感させてみたらどうかという意見をレイノルズに進言し、それを面白い考えだと感じたレイノルズが、待機ローテーションの中に彼女を組み込んだのだ。

さらに、寝食を共にする親友であり、成績的にも十分参加資格を満たしている彩雲、静羽、香鈴の3人をペアとして組み込むことで、色々な意味で彼女をバックアップしてもらおうという思惑もあり、めでたく(?)彼女達は本日の3番、4番待機組となっていた。

だが――

「能力的には、問題ない筈だけど……やっぱり心配かしら？」

「いや、心配なのは確かだが、能力的な問題じゃなくてだな……」

沙也華の言葉に、サイファアは複雑そうな表情を浮かべる。

そんなサイファアの視線の先を追い、沙也華はその言葉の意図を悟

った。

「あ……」

視線の先には、ランウェイ脇に体操着姿でへたり込む美風“達”の姿があった。

美風だけでなく彩雲、静羽、香鈴の3人も一緒である。

おそらく、4人が待機組であることを失念していた教官の誰かが、彼女達に罰則のランウェイを課したのである。

何を仕出かしたのかは分らないが、美風だけでなく彩雲達も走らされているということは、チーム制の授業が何かで大きなミスをしたのだろうか。

普段ならそのまま放っておくのだが、今現在彼女達は万全の体調が求められる迎撃待機メンバーなのだ。

いざ迎撃という時に、体力が限界では洒落にならない。

沖縄の暑さの下にへたり込む4人の姿を見て、レイノルズも少々心配そうな表情で沙也華に視線を向けている。

「……大丈夫なのかね？」

「あ、あはは……か、彼女達は、タフさだけが取り得ですから……」

そう言うと、沙也華は階段を駆け下りて美風達の元へ向かっていく。おそらく、美風達をパイロットの待機室へと向かわせるためだろう。そんな彼女をキョトンとした表情で見送りながら、レイノルズはポツリと呟いた。

「……タフさで言えば、沙也華君も十分に備えているな」

その呟きは決して広いとは言えない管制塔の中に響き、サイファー

を含む職員達は思わず失笑した。

「み、水う……」

体操服を大量の汗で濡らし、息を切らした美風達はだらしなく地面に座りこんでいた。

沖縄の太陽の下で熱く焼けたアスファルトだが、それすらも気にならないほど疲労しているらしい。

荒い呼吸に合わせて落ちる汗の滴が、地面に滴ってはあつという間に蒸発していく。

迎撃には最適な快晴が美風達には仇となったようで、走り慣れている(?)美風や体力自慢の彩雲も無様に蹲り、静羽は2人より死にそうな表情を浮かべている。

香鈴に至っては、表情だけ見ると生きているのか死んでいるのか分からない。

呼吸を乱し、覚束ない足取りで水飲み場に向かう美風と彩雲に、ゆっくりと息を整えながら静羽が言う。

「あ、彩雲……駄目よ、急にいっぱい飲んじゃ。今日は、待機順が早いんだから……」

「分かってる……」

そう言いつつ、彩雲は水飲み場の蛇口を大きくひねった。

太陽の光に熱せられてぬるくなっている水だが、彩雲の熱く乾ききった体には十分冷たく感じられ、静羽の言葉を忘れて思い切り飲み

そうになる衝動が溢れてくるのを必死に押さえる。

彩雲の隣で蛇口から勢い良く吹き出てくる水を頭から被っていた美風だが、ふいにその視線をゆっくりと滑走路に向けた。

蛇口から顔を上げ、汗と水を滴らせながらフラフラとランウェイに歩み寄ると、黄色いエンドラインのすぐ手前で立ち止まる。

そして、そのまま立ちつくしたまま、ボンヤリとエンドラインの線に視線を下ろした。

パイロットの聖域である滑走路と自分の立つ場所を隔てる線。

管制塔から駆け下りてきた沙也華の大声が聞こえても、その視線はしばらくエンドラインから外れなかった。

下地島迎撃基地の格納庫の1つ、アラートハンガーに面するランウェイ。

そこには、トレーラーに搭載された4機の超高高度迎撃機、TSR・2MSがその姿を太陽の下に晒していた。

その内の2機には、本日の1番待機と2番待機であるパイロットが乗り込んでいる。

「えっと、巡航高度3万を超えたあと、進路修正、標的軌道確認、それから……」

片方の機体のコクピットに収まってマニュアルを片手に迎撃時の行動を再確認しているのは、2番待機の地位を獲得した候補生の空であつた。

どこからどう見ても緊張している空に、前席からパートナーの翼が茶々を入れる。

「おいおい、今更何をビビッてんだよ！ ま、いざって時はこの俺様がビシッと決めてやっからよ！」

その何処から来るのか分からない自信を体で表すかのように、翼は後席の空に向けてサムズアップしてみせる。

そんなまるで事の重要さを何も理解していないような翼の言動に、思わず空は大声で叫んだ。

「バカか！？ それが不安だっつーの！ 初めての2番待機なんだぞ？ 緊張しろよ」

「ハハッ、心配すんなって。あと数時間後には、俺等はヒーローだぜ！」

空の言葉に臆する様子もなく、翼は揚々と言った。

その“数時間後にヒーローになる”ための要因、つまりは彗星の破片が落ちてくる可能性も低いのに、彼にはまるでそれが確定事項であるかのようだ。

そんな翼に呆れを通り越した複雑なものを感じ、それでも緊張がいくらか和らいだことを感謝しながら小さく溜息を吐く。

「まったく。もう自分が迎撃する気にいるぜ……ま、仮に出撃したとしても、墜とすのは岩崎先輩達だろうけどな」

そう言うと、空は隣のトレーラーに搭載された1番機のコクピットに視線を向ける。

そのコクピットには、2人とは反してリラックスした様子の和馬と圭が収まっている。

彗星の破片迎撃に於いて、迎撃機は2機ともミサイルを発射する。

しかし、2番機の発射するミサイルは1番機のミサイルの爆炎により砕かれた彗星の破片をさらに破碎し、迎撃を確実にするためのもの。

単純に言うと、1番機のバックアップだ。

そして、翼と空のポジションは2番機。

残念ながら、ヒーローポジションにはなれない。

「くっ……モテモテアイテムゲットだと思ったのによぉ……」

「……つたく、またそれかよ」

水を浴びせるかのような空の指摘に翼はがっくりと肩を落とし、呆れた空は小さく肩を竦める。

そんな2人の様子を、1番機の和馬と圭は面白そうに横目で眺めていた。

母なる大地から遙か上空に存在するオービタルステーションの1つ、第7オービタルステーション。

迎撃任務のためそこから発進した2機のコメットブラスターは、地球の軌道上を周回しながら彗星へとその矛先を合わせ、間もなく迎撃ポイントへ達しようとしていた。

機体の装甲は大気摩擦で赤く灼熱し、コクピットはその衝撃で激しく振動する。

それでも、4人のパイロット達は表情を変えずことなく機体を操る。彗星は、彼女達の肉眼でも捉えられる距離にまで迫っていた。

《ミサイル発射30秒前》

重要な局面の中、パイロットの1人であり1番機の前席を務める久保千鶴は、その実直そうな表情の中に僅かな蟠りの念を浮かべていた。

出撃前に行っていたダーツゲーム。

開始直前に出撃命令が出され、待機室へ移動する直前に遊び心で彼女が放ったダーツの矢。

真つ直ぐ的に突き刺さるはずだったダーツが、的に弾かれるように外れた。

自分の腕を過信するつもりはないが、幾度となくプレイしてきたダーツゲームだ。

狙った場所を少々外すことはあったが、弾かれることなどなかった。そのことが、千鶴にはとても気になっていた。

それはまるで、何かを予言しているかのような――

(……いや、考えすぎか)

自分の馬鹿馬鹿しい考えを振り払うかのように、千鶴は一瞬瞳を閉じて小さく首を振る。

自分達にはこの地位にたどり着くまでに並外れた競争率の狭き門を勝ち抜いた実力と、幾度となく出撃を繰り返した経験がある。

純粹に自分たちの能力を信用し、任務を達成すればいい。

《CB-1、CB-2、オンコース》

磨き続けた技量と、積み重ねてきた経験。

エリート中のエリートである誇り。

それが、彼女達の強さだった。

「ミサイル発射10秒前……」

操縦把を握り、表情を変えぬまま業務的に告げる。

《8……7……6……》

後席のナビゲーターを務めるアネット・ケイリーが、事務的な声色でカウントを刻み始める。

トリガーのロックを解除し、静かに指をかけた。

《4……3……2……》

カウントが減っていく毎に、照準器の中に映る彗星の姿がだんだんと大きくなっていく。

そして、そのカウントがゼロになり、同時にロックオンを示す赤いレティクルが彗星の中心を捉えた。

「フォックス1」

静かに言い、トリガーを引く。

直後、機体の腹に収まっていたトライデントミサイルが放たれた。

2発のミサイルは噴射炎の青白い軌跡を描き、彗星へと接近していく。

そして、コードで繋がれた3つの弾頭を周囲に展開する。

これが、“トライデント”の名を冠する理由。

人類の英知が生み出した、最強の三叉の矛。

「爆発まであと5秒」

再び、起爆トリガーに指をかける。

何の問題も発生しなかった。
あとは、ミサイルの弾頭を起爆させるだけ。
それだけだ。

「4……3……2……1……爆破」

先ほどと同じく静かに言い、トリガーを引く。

直後、真っ暗な宇宙に6つの橙色の炎球が出現し、遮るものもなく膨張していく。

そして、その爆発が重なった点から青白い光、プラズマカッターが発生。

それは真っ直ぐに彗星へと突き刺さり、その巨体を砕いていく。

（……終わったな）

プラズマカッターに碎かれ、6つの炎に飲み込まれる彗星の姿を見て、千鶴達は任務の終了を確信した。

事前の分析データから、この時点で地上からの迎撃も必要ないサイズに破碎されるという解析結果が出ている。

彼女達の仕事は終わった。

一定以下のサイズまで粉々となった破片の幾つかは、地球の大気圏に吸い込まれる。

だが、それは大気摩擦により燃え尽き、地上に到達する事はない。

任務を終えた2機のコメットブラスター機は、基地に帰還するために軌道を変更しようとする。

そのときだった。

「……ッ！」

その視界に飛び込んできた光景に、千鶴達は目を見開いた。

トライデントミサイルの爆炎に飲まれ、砕かれ、その姿を消すはずだった巨大彗星。

だが、爆炎の中から姿を見せた彗星の破片の大きさは、大気圏が消化できる“一定以下のサイズ”を遥かに超えていた。

格納庫に隣接するパイロットの待機室。

そこで熱くなつた体を冷やし、失われた水分をドリンクで補給した後、彩雲達はパイロットスーツへと着替え始めていた。

このメテオスライパー用のパイロットスーツは通常のパイロットスーツとは少々違う構造をしている。通常の航空機ではありえない超高々度を飛行し、さらに通常の5倍以上のGが襲い掛かるパイロットを護るべく、首から下全体を締め付ける仕組みになっており、そのためパイロット達は下着すら身につけることが許されない。

さらに、酸素供給機器の役割も持つヘルメットを被れば一種の宇宙服のような機能を発揮するのだ。

「美風！ のんびりしてないで早く着替えな！」

ぴつたりと体にフィットする真っ白なパイロットスーツに袖を通しながら、彩雲が美風を急かし立てた。

静羽は既にパイロットスーツに着替え終わり、傍には彼女に手伝ってもらいながらパイロットスーツに着替えている香鈴の姿もある。そんな中、美風だけがまだ下着姿のままだった。

気だるげな表情をしたままソファに寄りかかり、ドリンクのストローをくわえている。

「平気平気。そんなに張り切らなくても、どうせアタシ達まで出番回ってこないって」

「美風！ たとえ出番が無くても、これは任務なんだから……」

美風の言葉に、静羽が諫めるように言う。

確かに、美風の言う通り3番待機以降である彼女達に出番が回ってくる可能性はとても低い。

特に今回は、コメントブラスターによる一次迎撃で彗星は完全に破碎されるという解析結果が出ていた。

しかし、命令として待機が言い渡されている以上、美風達にはそれに従う義務がある。

誰にも予測できない事態、それが発生するのが実戦だからだ。

「まったく、アンタのそのいい加減な態度が迷惑だって分からな――」

相変わらずな美風に彩雲が言葉を続けようとしたとき、突如として甲高いアラート音が遮った。

その音に、美風達は息を呑む。

「……来たの？」

静羽が小さく言うが、この場にそれに答えることができる者はいなかった。

彩雲でさえ、言葉を続けるのを忘れて立ち尽くしている。

そして美風にも、そのボンヤリとした表情の中に僅かな焦りが浮かんでいた。

「軌道算出はまだ!？」

喧噪に包まれた管制塔では、焦燥感を露わにした沙也華が指示を飛ばし、情報を求めていた。

サイファーも、オペレーター達と共にコンソールに表示される報告を読み取っている。

メテオススイーパーによる一次迎撃失敗の報が下地島迎撃基地に届いたのは、今からほんの数分前のことだった。

破片の数や落下軌道はまだ不明。

だが、破片が下地島迎撃基地の担当エリアに落下してくるならば、一刻の猶予もない。

数日前から出撃が予測できるコメットブラスターと違い、今回のような緊急事態ではその予測すら満足にできないメテオススイーパーは、1分1秒が命運を分けるからだ。

しかしながら、そんな状況下でもレイノルズはずっしりと落ち着いた態度を崩さない。

そしてその姿が、管制塔内に確実な安心感を与えていた。

ややあつて、搭子が担当するコンソールに新たな表示が開き、彼女はすぐにそれを読み上げる。

「データ、届きました。飛来する破片は7つ。中国、ロシア方面が2つ、ミクロネシア方面に4つ……あつ、日本に1つ来ます! コーイスは当基地の迎撃担当エリア内です!」

「詳細は!？」

「破片は当基地の担当エリアを通過後、新潟県沖に落下。迎撃エリ

アへの進入は、16分後と予測されます！」

飛び込んでくる報告は、この下地島迎撃基地が迎撃を担当すること、そして時間がないことを示していた。

沙也華は小さく唇を噛み締め、指令の発令を仰ぐべく、レイノルズへと振り返る。

それに返答するようにレイノルズは短く頷き、号令を下した。

「下地島迎撃隊、発進せよ」

《スクランブル！ 1番機、2番機発進！》

けたたましいサイレンと共に管制塔からの指示がスピーカーから報じられ、それまで静かさに包まれていた基地の内部が、一転して活気に沸き返った。

迎撃機の周囲では、出撃準備のために整備員達が慌しく走り回っている。

「よっしゃあ！ 気合い入れろ！ てえら回せ！」

整備員達に檄を飛ばすかのように、佐古は腕を回して叫ぶ。

その中の聞き慣れない言葉に、コクピットから翼と空が顔を出し尋ねた。

「て、てえら？」

「何すか、それ？」

その問いに、佐古は2人が沖縄方言にあまり精通していないことを思い出し、豪快に笑いながら言った。

「ハッハッハ！ 気分だよ、気分！ それより、てめえ等分かってんな？ 下手打ったら、ただじゃおかねえぞ!？」

「へっ」

「……プレッシャー、きついっす」

脅すような佐古の口調。

その中に自分達への思いやりを感じ取った翼と空は、それぞれの返事を返した。

2人の言葉に適度な緊張感と落ち着きを感じ取った佐古も、満足そうな笑みを浮かべて出撃準備の作業に移る。

そして数分後、発進準備が全て完了した。

《サシバ11、サシバ22、クリアフォーランチ!》

管制塔からの、発進許可の指示。

それを聞き、和馬と翼はエンジン出力を一気に上げる。

直後、轟音と共にカタパルトから弾き出された2機の迎撃機は、猛スピードで青い大空の中へと飛び出していった。

「ただの尻拭いじゃねえってとこ、見せてやれよ……」

白煙を吐き出して一直線に上昇していく2機の迎撃機。

その姿を見送りながら、佐古はパイロット達に語りかけるように呟いた。

「うわ、ホントに出た」

迎撃機が遙か上空へ飛び立つその様を、待機室の窓から彩雲と静羽は眺めていた。

メインエンジンとブースターを併用した迎撃機の轟音が、距離の離れた待機室のガラスを震わせている。

今回が初の実戦待機である4人にとって、パイロット待機室から迎撃機の発進を見るのは初めてのことであった。

そんな彩雲達の体に、妙な新鮮さと緊張が彼女達の体を駆け巡る。

「アタシ等の待機順が繰り上がるよ……」

ポツリと呟かれたその言葉に、美風の体が一瞬硬直した。

ありえないと思っていた出撃。

和馬や翼達が撃墜するだろうとはいえ、いざとなれば美風達が空に上がることになる。

ようやくパイロットスーツに着替える美風だったが、ファスナーを上げるその指は、微かに震えていた。

零距离発進、そしてブースターの加速による凄まじいGに押さえつけられながら、幾度となく出撃を経験している和馬は慣れた様子で操縦桿を握り、圭は和馬に的確なナビを行う。

初出撃の翼と空は、緊張に震えそうになりながら、それでも大きなミスもすることなく先輩達に追い縋っていた。

《サシバ11、サシバ22、目標高度3万フィートに接近》

管制塔からの報告が、順調なフライトであると和馬達に伝えた。

パイロット達の視界に彗星の姿は映らないが、彼らの進む先にはその巨体が確かに存在する。

「目標高度到達。ブースター切り離しまで、あと30秒」

ナビゲーターである圭の両眼は変化し続ける計器の値を追い、パイロットの和馬に情報を伝える。

機体も内部機器も順調。

このまま2機のTSR・2MSは一直線に彗星の破片へと向かい、懷に抱えるミサイルを発射。

隕石は撃ち砕かれ、今度こそ大気圏で消滅するサイズとなり、大気摩擦で消滅する。

そのはずだった。

「……ッ!？」

前方を注視していた和馬の目が、突如として大きく見開かれる。

彼の両眼には、自分達の進路を遮るように広がる黒い点の群集が映し出されていた。

《サシバ１１、サシバ２２、共にアボート！》

「うそつ、何で!？」

備え付けられたスピーカーから流れ込んできたオペレーターの報告に、彩雲は思わずそう叫んだ。

アボートとは、目標達成に失敗することを意味する。

それが共にということは、２機の迎撃機がほぼ同時に任務続行不能に陥ったということだ。

静羽は即座に備え付けのノートパソコンに取り付き、更新されたフライトデータを引き出そうとする。

その横に彩雲も座りこみ、静羽と共に情報を手に入れようとデータに目を走らせる。

香鈴はいつもの無表情であったが、携帯を打つ指の早さが心なしに早くなっている。

そして美風だが——この状況を理解できているのかいないのか、着替え終わってもなおボンヤリとした視線を壁に向けていた。

そんな四者四様の状態に関係なく、スピーカーからは慌てる翼の声と、落ち着いた和馬の声が流れ続ける。

《サシバ２２、無事か!？》

《い、インテイクに吸い込んだみたいです》

《こっちはキャノピーを掠っただけだ！ 先に降りろ!》

《で、でもそちらのエンジンから火が噴いているのが見えますよ!》

《大丈夫だ、これぐらいは何度も経験している！ 心配してくれるなら、少しでも早く降りろ！》

《す、すみません！》

翼と和馬の会話だけでなく、それに混ざるようにして時折ナビゲーターである空と圭の報告が加わっている。

どうやら、4人とも無事であるようだ。

しかし、状況が不明瞭であることには変わらない。

そんな状況の中、この和馬達の会話の中からもっとも早く状況を掴み取ったのは、驚くことに美風であった。

慌てる声が洩れ続けるスピーカーに向けて顔を上げ、掠れるような声で呟く。

「……バードストライク？」

その言葉に、静羽と彩雲はハツとした表情を向けた。

「サシバ11、サシバ22、迎撃コースより離脱！」

迎撃コースを外れる2つの光点をレーダー上に確認しながら、オペレーターがそう報告する。

「くそっ、バードストライクとは……厄介なときに」

一気に慌しくなった管制塔内で、サイファーは誰に向けるともなく言った。

バードストライクとは、飛行する鳥類との衝突事故の総称である。主に航空機と鳥類の衝突を指すが、車や電車、灯台などでも発生する。

そして、その全てに共通するのが回避の難しさだ。

特に、航空機においては目視後の回避はベテランパイロットでも困難を極める。

その任務上通常の航空機を凌駕する速度で飛行し、しかも目標に到達する最短距離を突っ切るメテオスーパー機ならなおさらだ。

時には航空機のキャノピーすら貫通することもあるバードストライクに遭遇しながら2機とも健在なのは、まさに不幸中の幸いであるう。

だが、いまはただでさえ一秒一刻を争う彗星迎撃である。

その重要な役目を担った迎撃機が行動不能に陥ったのだ。

もう、一刻の猶予も存在しない。

「司令！」

「……うむ」

沙也華の言葉に、レイノルズは重々しく頷いた。

そして、オペレーターが放送機器に向けて新たな指令を通達する。

「サシバ33、サシバ44、スクランブルオーダー!!」

雛鳥たちの、初出撃の時が来た。

CODE : 204 FOX ONE

控え室にアラート音が鳴り響いた。

スピーカーを睨む美風達に、管制塔からの出撃命令が下される。

《サシバ33、サシバ44、スクランブルオーダー!!》

「うそ……」

出撃命令に、美風の顔から血の気が引いていく。

ありえないと思っていた出撃命令。

この命令からは逃げることでできず、自分は絶対に出撃しなければならぬ。

その現実最後の抵抗でも試みるかのように、美風は彩雲達の方を見る。

出撃命令なんてありえない、これはただの聞き間違いだ。

彩雲達の顔を見ればそれが分かる、と。

だが、その儚い願望は脆くも崩れ去る。

彩雲達の表情は、出撃命令が現実のものだということを顕著に表していた。

「いよいよ来たわ……!」

美風とは逆に、現実をしつかり見据えた声で静羽が言う。

それを受けて、彩雲も自らを奮い立たせるように雄叫びを上げた。

「よっしゃあ! 汚名挽回のチャンス到来!」

「……彩雲、汚名は“挽回”じゃなくて“返上”……」

「細かいことは気にしない！」

誰よりも早く彩雲が滑走路へと通じるドアを蹴り開けるようにして飛び出していく。

それに続き、静羽と香鈴もヘルメットを片手に駆け出していった。

「あ、待って……」

3人を追うように、美風もヘルメットをつかんで駆け出す。

それは、出撃命令という現実を見据えたからではない。

単に、独り待機室に取り残されるのが恐ろしかっただけ。

恐怖心に追われるように、美風は待機室を飛び出す。

そして、“それ”が視界に飛び込んできた。

「あ……」

太陽に灼かれたアスファルトの上、トレーラーに搭載されたTSR・2MS。

それを目にした瞬間、美風の走りが急に重くなった。

見慣れた滑走路が、ランウェイが遠い。

ドクン、と心臓が跳ねる。

体が思うように動かない。

足が重い。

必死に足を動かしているはず。

なのに、彩雲達との距離はどんどん離れていく。

(どうして……なんでこんなに足が重いのか……?)

疑問が頭を駆け巡るが、答えは出ない。

いや、もはや答えを出そうとする余裕すらなくなっているのかもしれない。

（あ……）

目に飛び込んできた、黄色い直線。
ランウェイの黄色いエンドライン。

自分と滑走路を隔てる、1本の境界線。

気がつけば、美風はその線を見下ろす位置で立ち止まっていた。
いや、“立ち止まってしまった”と言ったほうが正しいだろう。

美風の視線はエンドラインに吸い込まれるように固定され、脚はまったく動かない。

（ど、どうしよう……）

行かなければならない、それは分かっている。

あとほんの僅かな時間の後に、彗星の破片が落ちてくるのだ。

1つ落ちるだけで、何百、何千もの人々に絶望を振り撒く悪魔の欠片が。

そして自分の目の前には、それを撃ち落とすための力がある。

それを操るのは、自分しかできない。

だが――

（ホントに、アタシがやるの？）

ふいに、美風の脳裏に幼い頃からの記憶が駆け巡る。

父から借りたパイロット帽を被り、天真爛漫な笑みを浮かべる自分。
思い出される、両親との会話。

それはまるで、死に際の走馬灯であった。

『美風は、やればできる子なんだ』

常に自分に課題を課してきた、父の言葉。
その言葉に従い、努力は続けてきた。

『貴女は、パイロットになるのよ』

自分の未来を確定させた、母の言葉。

その言葉通り、自分はパイロット候補生としてここにいる。

——でも、何のために？

栄光ある将来を手に入れるため？

——でも、誰のために？

自分のため？

それとも——

（アタシが決めたんじゃないのに……アタシが行きたいわけじゃないのに……！）

この道は、自分が選んだ道じゃない。

親に決められ、歩かされてきた道。

しかし、別の道を選ぼうとしなかったのも自分。

（無理だよ……アタシには無理……！）

現実から逃れようと、美風はきつく瞼を閉じる。

だが、時間は規則正しく、無慈悲に過ぎ去っていく。

（嫌だ……こんなの、アタシには重すぎる……）

失敗すれば、隕石は多くの生命を吹き飛ばす。

人がたくさん死ぬ。
自分のせいで。

『美風？』

『何してるの！？』

既に機体へたどり着いた彩雲達が、自分を呼ぶ。
距離にすれば、十数メートルにも満たない。

なのに、まるで何百メートルも離れているかのように遠く聞こえる。
答えなければいけない。

だけど、応えることができない。

足に力を入れようとしても、まったく入らない。

（ダメ……動けない……）

足どころか、指先一つ動かすことができない。

まるで、見えない鎖が美風の体をきつく縛り上げているかのように。
無論、見えない鎖など存在するはずもない。

縛り付けているのは、己自身の感情なのだ。

そして、こうしている間にも時間は刻々と迫っている。

（こんなの嫌……誰か……）

必要なのは、たったの1歩。

だが、その1歩が踏み出せない。

平面であるはずのエンドラインは、今の美風にとって全てを遮る巨壁であり、全てを飲み込もうとする絶壁であった。

（誰か……）

世界が歪み、色を失う。
彩雲達の声がどんどん遠退いていく。
視界が回転し、混濁していく。

（助けて——！！）

心の中で叫ぶ。

その声に誰も応えることはない。
意識は混濁し、もはやいつ倒れ伏してもおかしくない。
次第に、意識が闇に飲まれていく。

——その時だった。
背中に向けて、誰かの叫ぶ声が聞こえた。

「飛び立て、本庄！」

（——サイファー教官……！？）

それは、サイファーの声。
その声に美風が振り向いたとき、それは起こった。
管制塔の上で力なく垂れ下がっていた吹き流しが、勢い良く膨らむ。
直後、一陣の風が下地島を駆け抜けた。

「……あつ！」

駆け抜けた風は美風の背中を押し出し、宙へと舞わせる。
そして気がつけば、あれほどまでに強張っていた足が前へと踏み出していた。

（風が……押した……？）

ボンヤリとした意識の中、美風はそんな感覚を抱く。

「本庄！ 何をしているか！！」

佐古の声に、美風は意識を取り戻した。

気づけば、闇に染まっていた視界に色が戻り、空は再び蒼く染まっている。

美風は呆然と自分の足元を見つめた。

その足は、確かにエンドラインを踏み越えている。

「越え、た……？」

小さくつぶやき、目を閉じ、そして噛み締める。

そこにあるのは全てを遮る巨壁でもなく、全てを飲み込もうとする絶壁でもなかった。

そんなものはただの幻想。

そこにあるのは、平面でしかないただの黄色い線だ。
目を開き、美風は振り向いた。

「……サイファー教官！」

美風の表情と言葉にサイファーは笑みを浮かべ、小さく促す。

その笑みに答えるかのように、美風の顔にも久しぶりの穏やかな笑みが浮かんだ。

「……行ってきます！」

「ああ、行ってこい！」

自分の言葉にサイファーが頷くのを見ると、美風は駆け出した。その走りに、もう迷いはない。

トレーラーに全力で駆け寄ると、キャノピーを開きながら自分を待つTSR・2MSのコクピットへと飛び込んだ。

そんな彼女の背中に、先にナビ席に収まっていた静羽が声をかける。

「まったく、サイファー教官にまで迷惑かけたらだめですよ。……それで、大丈夫なの？」

最近の美風の状態を知る静羽の声は、かなり心配そうだが、美風は答えない。

「美風……？」

何かあったのか、と前席を覗き込む静羽に振り返ると、美風は暗い感情を振り切った笑みで言った。

「ごめん、ちょっと考え事してただけ！」

それは、今の短い沈黙のことか。

それとも、悩み苦しんでいた長い時間のことだろうか。だが、そんなことはもはや関係ない。

ここにいるのは、飛び立つ覚悟を決めた1羽の雛鳥。

そんな彼女の声を聞いて、静羽は安堵の表情を浮かべた。

「それじゃ、今までの借り、返しにいくよ！」

「もちろん!!」

静羽の言葉に美風は軽快な答えを返し、操縦桿を握りしめる。

その瞳は、力強く空を見つめていた。

「グラウンド！ サシバ33、スターティング・エンジンズ！」

眠っていたエンジンが目を覚まし、雄叫びのように唸りを上げ始める中、コクピットに確かな美風の声が響く。

彼女の心も今、長きに眠っていたエンジンが唸り声を上げている。

「ビフォー・スターティング！」

トレーラーのキャリアがゆっくりと迫り上がり、TSR・2MSの機首が持ち上がる。

同時に、キャノピーから陸と地平線が消え、映るものは真つ青な大空のみとなった。

美風は操縦把を握ったまま、計器類に抜かりなく目を馳せる。

ヘルメットに内蔵されたインカムマイクから、静羽の機器確認の聲が流れてくる。

《ビーコンライト》

「オン！」

《バックバルブス》

「オープン！」

《スタートプレッシャー》

「43PSI！」

不思議な感覚だった。

まるで自分の体が機体とひとつになるような感覚。

駆け抜ける感情は緊張だろうか、それとも喜びと驚きだろうか。

震える体は機体の影響だろうか、それとも感動と武者震いだろうか。
分からない——いや、知らない。

まさに、未体験の感覚。

ただ、分かるのは——

「ビフォースターティング、コンプリート！」

《スタート、ナンバー2！》

「サシバ33、レディ・フォー・ランチ！」

ただ分かるのは、早く飛びたいという思いだけ。

《サシバ44、レディ・フォー・ランチ！》

射出用意完了。

自分たちの準備は万端。

《ランチパッド、クリアー》

トレーラーで射出機器の準備を完了した佐古が、報告を挟む。
全ての準備が完了した。

それを確認した管制塔から、最後の通告が下る。

《サシバ33、サシバ44、クリアーフォーランチ》

心拍数が機体の振動に呼応する。

このまま心臓が爆発してしまうのではないか？
そんな感覚まで持ってしまうほどに。

「ラジャー。サシバ33、クリアフォーランチ！」

《ラジャー。サシバ44、クリアフォーランチ！》

ほんの一瞬、目を閉じる。

暗闇に思い描かれるのは、迷い続けていた小さく幼い自分の姿。
助けを求めるように、手を前に突き出している。

その姿に向けて、手を差し伸べる。

そして、2人の手はしっかりと繋がった。

《パワー、セット！》

静羽の声が届くと同時に、目は開かれた。
その輝きに、もう迷いはない。

「ブラスト・オフ！」

美風は渾身の力でスロットルレバーを全開にする。

直後、激しい噴煙と爆発音を吹き出しながら2機の迎撃機は飛び立つた。

力強く、そして優雅に。

だが、そのコクピット内には強烈な振動とGが美風達に襲いかかる。
計器もめまぐるしく変化し、高度計も急激な速度で上昇していく。
真っ白な雲海に近づいたかと思えば、次の瞬間にはそれを突き抜けている。

そして、その先には雲ひとつない世界が広がっていた。

《ブースター、バーン・アウト》

「ブースター、セパレーション！」

《ブースター、セパレーション》

美風の掛け声で、ブースターポッドが切り離される。

直後、機体自身が持つロケットブースターから炎が噴き出した。先ほどのGを超える圧力が、美風達へと押し掛かる。

「くっ……！」

思わず、美風の口から小さな悲鳴が漏れる。

だが、その視線は揺るがない。

前を目指し、真っ直ぐに見つめ続けている。

そして不意に、見つめ続けていた空の色が変わった。

「あ……」

その視界に映る深い色。

それが意味するものを、美風は無意識の内に理解した。

「宇宙……」

それは、空の向こう側に繋がる色。

「この向こうが……宇宙……！」

成層圏の色だった。

美風達が飛び立った後、サイファーはトレーラーに背を預けながらぼんやりと空を眺めていた。

視線の先には、サシバが悠々と空を舞っている。

「おや、サイファー教官。まだそんなところにいたんですか」

声に振り向くと、トレーラーから降りてきた佐古がこちらに歩いてきていた。

「佐古主任か。なに、空気が張り詰めた管制塔にいるよりこっちの方が気分が良いからな」

「ああ、なるほど。……それにしても意外でしたね。サイファー教官があんなことするなんて」

「あんなこと……俺が何かしたか？」

佐古の台詞に、サイファーは首を傾げる。

そんな彼に、佐古は言葉を続けた。

「ほら、大声で叫んだじゃないですか。“飛べ、本庄！”って。失礼ながら、自分はそんなことする方ではないと思っていましたよ」

「ああ……」

ようやく思い出したかのように、サイファーは手を小さくポンと打

っ。

そして、少し照れくさそうに言った。

「俺だって、叫んだりするさ。ロボットじゃないんだからな」

「いやはや、こいつは失敬。ところで、なんであんな風に叫んだんですか？」

「ん？ そうだな……」

佐古の質問にサイファアは言葉を区切ると、胸ポケットからタバコを取り出す。

だがそれに火をつけることはなく、エンピツ回しのように指先でクルクルと弄ぶ。

そして、ゆっくりと語り始めた。

「……あいつは、“雛鷺”なんだよ」

「“ひなわし”……？」

サイファアの呟いた聞き慣れない単語に、今度は佐古が首を傾げる。そんな彼に、サイファアは言葉を続けた。

「The Baby of Eagle」……俺の故郷で、恐怖やプレッシャーで飛べなくなった新米パイロットを意味する言葉だ。大概は、初めての実戦前にそうなることが多いな」

語り終えると、サイファアは一度空を眺める。

その視線の先には、白煙を曳いて空高く昇っていく、2機の迎撃機。もう米粒ほどにも見えないその姿を眺めながら、サイファアは少し

眩しそうに目を細める。

「……どんなに力強く空を飛ぶ鷲でも、雛のとき、初めて飛ぶときには空を恐れ、躊躇するもの。だが、1度でも飛んでしまえば、あとは自然と空を舞うことができる。そして、大きく力強い鷲——つまり、立派なパイロットになってくれる……そんな意味と願いがこめられた言葉だ」

「なるほどな。……んで、その雛鷲は無事に飛び立てたのかい？」

冗談めかした佐古の言葉に対し、サイファアは苦笑しながら答える。

「それは帰ってきた後のあいっ次第だよ。1度飛べたとしても、2度目も風に乗れるとは限らないからな。——ついでに言っと、飛び立ったばかりで拙い飛び方をする雛鷲は“猟師”に狩られてしまうことも少なくないんだが……まあ、この空に危ない“猟師”はいないから、きつと大丈夫だろう」

「はっはっは、そりやそうだ！」

最後は冗談を返してきたのかと思ったのか、佐古は愉快そうに笑う。平和な世界に生きる故、その言葉に隠された意味を知らないから、笑うことができる。

“猟師”とは“敵兵”のことであり、“狩られる”とは文字通り“殺される”ことを示していることを。

そんな彼を少し羨ましそうに見つめた後、サイファアは上空に視線を戻す。

美風達の“飛び立ち”を見届けるために。

《ターゲットインサイト！ ミサイル発射準備！》

「ッ！」

未体験の色に見惚れていた美風は、静羽の声で現実に取り戻された。トリガーを握り直し、改めて視線を前方に向ける。その視線の先には、大気摩擦により炎を纏う隕石の姿があった。

《発射10秒前……8……7……》

安全装置を外し、ミサイル発射トリガーに指を掛ける。

トリガーに触れるか触れないかのところで、人差し指が小刻みに震えていた。

《6……5……4……》

（サイファー教官……）

緊張の中、美風はサイファーのことを脳裏に思い描いていた。

《3……2……1……》

彼のことを想っていれば、失敗する気がしないから。

（私に……力を貸してください！）

気付けば、その指の震えは止まっていた。

そして――

《……ゼロ！》

カウントダウン終了。

同時に、ロックオンを知らせる音が狭いコクピットに響き渡った。

「フォックス1！」

コールとともに、美風はミサイルの発射トリガーを力強く引く。
時を同じくして、後方に続く彩雲もまたトリガーを引いた。

《フォックス1！》

2機の迎撃機が、今まで大切に抱え込んでいたミサイルを放つ。
ミサイルは真っ白な煙を吐き出しながら加速し、母機を瞬く間に引き離して真っ直ぐに突き進む。

その矛先は、落下してくる隕石を完璧に捉えていた。

「帰ってきたな……」

再び穏やかさを取り戻した下地島の、青く澄んだ空。

サイファアの瞳には、だんだんと近づいてくる2機の迎撃機の姿が
しっかり映っていた。

基地のあちこちに設置されている放送機器が、美風達の声を基地全体に届けている。

《クリアー・トゥ・ランド、ランウェイ１－７、サシバ３３！》

《クリアー・トゥ・ランド、ランウェイ１－７、サシバ４４！》

基地の中はもう大騒ぎだ。

パイロット候補生たちは仲間の成功を祝うために講義の最中にもか
かわらずかけ出してくる。

授業を受け持つ教官まで、彼らと共に飛び出してきていた。

整備員達もバードストライクによる損傷の修復を中断して集まっ
てくる。

おまけに、厨房からも料理が焦げるのお構いなしで調理人達が飛び
出してきた。

気づけば、基地内にいる人間のほとんどが美風たちを迎えるために
滑走路へとかけ出してきていた。

「ハッハッハ！ やりやがったな、こん畜生！」

トレーラーに背を預けながらその光景を眺めるサイファアの隣で、
佐古は叫びながら嬉々として腕を振る。

すぐ側には、損傷した機体から降りて地面に座り込む空と翼の姿も
あった。

「なんだよ、先越されたぜ」

本来なら、あの歓声は自分たちに向けられるはずだったもの。

だが、その不満そうな、しかし少しだけ嬉しそうなその表情には、
どこか安心した感情も浮かんでいる。

普段皮肉を言っている、やはり仲間は仲間。

その復活と成功には、素直には言えないものの賞賛の念を向けて

いた。

「よっしゃー！ 初撃墜、ゲッターー！！」

機体から真つ先にランウェイに降り立った彩雲が、ヘルメットを外して興奮した様子で叫ぶ。

続いて降り立った静羽と香鈴も、ヘルメットを外して思い思いに圧縮空気ではない新鮮な空気を胸一杯に吸い込む。

「ふう。これで、ハンデは帳消しになるといいね」

「……うん」

現実的なことを言う静羽だが、その興奮は未だ冷めていないようだ。そんな彼女の言葉に、いつもと変わらぬ無表情ながら香鈴も首を縦に振る。

そして三人に遅れて地面に降り立った美風は、ヘルメットを外すと狭いヘルメットに押し込まれていたツインテールを小さく振る。

「よう、ご苦労だったな」

「あつ、サイファー教官……」

駆けられた声に振り向けば、そこにはいつの間にか側に立っているサイファーの姿があった。

サイファーは仕事を終えた機体を軽く叩くと、笑みを浮かべながら美風に視線を向ける。

「どうだ、本庄。足掻いてみてよかっただろう？」

サイファアの言葉に、美風は先日会話を思い出す。
そして、満面の笑みで返事した。

「……はい！」

翌日の昼下がり。

昨日の喧騒が嘘のように静かな下地島で、逆に昨日の喧騒以上かもしれない賑わいを見せている場所があった。

相変わらずの昼食時の賑わいを見せている中華料理店、広陳。
ありがたい商売繁盛の裏では店員たちが飛び交う注文や配膳、片付けに忙殺され、走りまわっている。

「おまたせしました！ こちらのテーブルへどうぞ」

「日替わり都合5つ、冷やし中華7つ、餃子3枚です！」

チャイナドレスに身を包んだ静羽、彩雲、香鈴、ランの四人が、料理の乗った大皿や伝票を抱えて店内を駆け回り、テイトクは香鈴を追いつけ回す。

しかし、また美風の姿はない。

「ったく。こんな時に、またあのボンヤリ娘は行方不明かい？」

「すみません……」

厨房で休み無く中華鍋を振るうリンが背中越しに誰に対してもな

い愚痴を投げ掛け、静羽が申し訳なさそうに詫びる。

静羽が謝るのは筋違いとも言えるが、謝るべき本人が居ないのだから仕方がないのかもしれない。

そんな彼女にリンはそれ以上何も言わず、静羽も再び忙しく店内を駆け回り始める。

と、その背中に向けて遠慮がちに声を掛ける者がいた。

「あの、僕等の注文……」

声の主は、広陳へ昼食を取りに来ていた空と翼。

しかし、その言葉が届くことはない。

静羽達は慌しく走り回り、一般客達の対応に追われている。近くを通りがかつても、彼らの声に反応することはない。

“身内なんだから協力しろ。むしろ一般客の邪魔だから早く出て行け”。

そんな空気すら漂っているようにも感じられた。

「諦めろ、翼。俺たちは広陳で昼飯食えない定めなんだよ」

「くっ……」

もはや諦めがついたような空の言葉に、翼は力なくテーブルに突っ伏す。

そんな彼らの嘆きを知る由もなく、静羽は叫んだ。

「もう、美風は何処に行っちゃったのよ！」

静羽が叫んだちょうどその頃、当の美風は再び“フタウサギバナタ”へとやってきていた。

今回はボーッと海を眺めるわけでもなく、“サシバ像”の傍にしゃがみ込み、何か折っている。

「……よし、出来た！」

出来たのは、紙飛行機。

サイファアの折り方を真似して折った紙飛行機を、美風は海に向けて飛ばす。

この前は風に煽られ、自分の方に突っ込んできた。だが、今度は違った。

潮風を背に受け、真っすぐ飛び続けている。

それを眺めながら、美風は昨日のことを思い出していた。

「……あの時、確かに風が背中を押してくれた……。そのおかげで、アタシ……逃げないで済んだんだ」

海から吹いてくる潮の香に満ちた風。

それを体全体で受けとめるように美風は胸を張る。

「……大丈夫、もう絶対逃げたりしない」

決意を表し、背後の“サシバ像”を見上げるが、“サシバ像”は何も答えない。

ただ、大空の向こうを見続けているだけ。

だが、今の美風には、その目に“飛ばう”とするはつきりとした“意志”を感じることができた。

紙飛行機も、美風の決意を祝福するかのようになり、天高く舞い上がった。

ていく。

「あなたの分もアタシが飛んであげる。それに……」

そう言つて、美風は、海の方を見つめなおす。

思い出すのは、この場所での会話。

そして、風と同時に自分の背中を押してくれた、あの時の声。とても力強く、温かい声だった。

彼が居たから、自分は踏み出し、飛ぶことができた。

だから――

「……絶対に凄腕のパイロットになって、サイファー教官に認めてもらうんだから！」

「雛鷺は無事に飛び立った、か……」

仕事を終えたTSR・2MSが翼を休める、静かな格納庫の中。

未だ消されることなく残っている美風の落書きを眺めながら、サイファーは呟いた。

思い出すのは、昨日の美風の笑顔。

崩壊直前だったヒヨっ子が無事に復活し、おまけに大きな戦果まで挙げて帰ってきた。

このまま育っていけば、きっと良いパイロットに成長してくれるだろう。

「これから面白くなりそうだな……」

思わず、サイファアは小さな笑みを浮かべる。

そして、格納庫を出るため機体に背中を向け——ふと何かを感じたかのように周囲を見渡す。

「……何だ？ このミサイルに……いや、もっと別の何か狙われて
いるような感覚は……」

自分以外に誰もいない格納庫の中、サイファアの呟きは答える者もないまま小さく反響して消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7352f/>

ストラトス・ZERO

2010年12月10日02時33分発行